水色pink（短編集）

motomi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
水色ｐｉｎｋ（短編集）

【Ｎコード】
Ｎ０８８４Ｏ

【作者名】
ｍｏｔｏｍｉ

【あらすじ】
貴族の少女と奴隷の青年や、高校生男女のお話など。色んな設定で書き綴った短編集。今後増えていく予定。ほんのり恋愛風味の恋愛未満が多いです。

まなざしのむこう（高校生男子）

〇一：セーラー服の君

……あ、

まただ。春樹が視線を感じて振り向くと、いつものようにあの少女がこちらを見つめていた。

いや、見つめているというか、あれは。

睨んでる、よな。絶対。

濃紺のセーラー服は確か秀華女子高の制服。長い黒髪を緩く二つで縛り、可愛いというよりはどちらかというと綺麗という形容が似合う少女。笑った顔はどんなだろ。少女の美人っぷりに、ふと好奇心がわくも、春樹に向けられるのはいつも気難しげな表情ばかりだ。

「ねえ、なに見てるの？」

隣を歩いていた少女が春樹の袖を掴む。

セーラー服の君とは対照的に、愛らしい印象の少女。柔らかい色合いの髪の毛はふんわりとウェーブし、くりくりした瞳が見るものの庇護欲をかきたてる。数週間前告白された、春樹の新しい彼女である。

「いや、なんでもないよ」

にっこり微笑んでそういえば、可愛らしい恋人は恥ずかしげに「そう」と呟き俯いた。

初心だなあ。

春樹が初めての彼氏だという彼女は、付き合ってまだ数日ということもあり、彼の一挙一動に緊張し、その白い頬を朱に染める。

告白をされたときもそうだった。見ているこちらが心配になるほど緊張し、声は振るえ、ぎゅっと握り締められた手は力を入れすぎて掌に爪あとが残るほどだった。

「す、すき……です」

あの時、告白され自分のことが好きだといわれた時、春樹は確かに目の前の少女に愛しさを感じた。同じ学校、同じ学年の、それまで話したことがなかった少女。

彼女曰く、一年のときに同じ委員会になり、その時春樹のことを好きになったらしい。ほとんど一目ぼれで、その後友達に春樹の話を聞き、遠くから彼の姿を見ているうちにどんどん好きになっていったと。

そう話す彼女はこれまで見たどの女の子よりも可愛く感じられ、春樹はその告白に是と返事をした。付き合っている子はいなかったし、彼女のことを好きになれると思ったのだ。

傍らに立つ恋人の話に耳を傾けながら、春樹は、少し離れたところからじっと自分をとらえる視線に不思議な感情が芽生えるのを感じていた。

〇二：夏

カチカチカチ

祖母の家の縁側で、春樹は愛しい恋人にメールを打っていた。夏休み、母の里帰りに同行した彼は、それまで毎日会っていた恋人とのしばしの別れを遠距離恋愛ごっことして楽しんでいた。

祖母の家から帰ったら、海へ行こうとか、そのために買った水着を見るのが楽しみだとか。夏祭りや花火大会にも行こうね、とか。遊びの約束ばかりしていた春樹を、勉強も少しはしようね？　と彼女がたしなめたりとか。

他愛ない内容のメールが行ったり来たり。

彼女とつきあって二ヵ月と少し。順調だと思う。彼女のことは好きだし、彼女もようやく恋人という関係になれたのか、今では結構素の自分を見せてくれる。恥ずかしそうに頬を染めることは今もよくあるが、初めのときのように緊張することはなくなり、笑顔をよく浮かべるようになった。

「なーにしてんの」

突然手の中の携帯が奪われ、春樹は驚いて起き上がった。

「ちょ、返せ！」

「ええと、なになに？　『夜電話する。早く声が……』」

「わー！　勝手に読むなっ」

体勢を立て直し、手を伸ばせば、すぐに携帯は己の手の中へと戻ってきた。身長の差と、力の差。相手もからかいのつもりで取り上げただけなので、救出は容易だった。が、メールの中身はすっかり読まれてしまったようだ。

「葉子ちゃんって、春樹の彼女？　『早く声が聞きたい』なんて、アツアツだねえ」

「だから読むなっつの」

「どんな子？　可愛い？　写メとかないの」

好奇心てんこ盛りの従姉に、渋々１ヶ月記念に撮ったプリクラを見せてやれば満足気に「可愛い子じゃなーい」と背中を叩かれた。

「ちょっと大人しそうな子だけど、守ってあげたい感じ？　いいじゃん、いいじゃん、合格」

「合格って、亜紀に俺の彼女をどうこう言われるつもりないんだけど」

「えー、冷たいなあ。一緒にお風呂入った中でしょ」

「何年前の話だよ」

「むむ、その口の聞き方。おしめ替えてやった恩を忘れたか」

「おしめって……俺ら同い年だろ」

どうやって替えたんだよ。そう突っ込んでやれば、「そうでした」とふざけた応えが返ってきた。

母さんの妹の子の亜紀は、今年高二の春樹と同い年。地元も近いせいでなにかと交流が多く、従兄弟たちの中では一番仲が良い。言い換えれば一番容赦がないということでもあり、さきほど春樹の携帯を取り上げたように、亜紀は春樹に対してプライバシーという概念をとっくの昔に投げ捨てたようである。

「そういえば」

「ん？」

「亜紀って秀華女子だったよな、学校」

「うん、そうだけど。なんで？　あ、もしかして彼女さんがウチの学校……じゃないよね、写メ春樹と同じ制服だったし」

「いや、彼女じゃなくて、」

そう口を開いて、春樹は言いよどんだ。

彼女じゃなくて、なんだ？
自分は一体亜紀になにを聞くつもりなんだろう。
突然黙り込んだ春樹に、亜紀は首をかしげた。その拍子、彼女の黒い髪がさらりと肩に零れ落ちる。春樹の脳裏に亜紀と同じ黒髪の少女の姿が浮かんで消えた。

０３：帰郷

彼女とデートの約束があるため、一足早く祖母の家から帰路に着いた春樹は、駅で電車を待っていた。ＪＲから私鉄へと乗り換え、家の最寄り駅まであと一本電車に乗るだけだ。

暑……

むわっと身体にまとわりつく熱気に滲む汗を拭おうとしたとき、反対側のホームに涼しげな白いセーラー服が眼に入った。
夏休み前に彼女を見てから数週間。久しぶりに見る少女の姿に、どうしてか夏の暑さとは別の熱が彼の身体を蝕んだ。初めて彼女を見たときの濃紺の制服とはガラリと印象が異なり、半そでの白いそれから日焼けなどとは無縁の透き通るような肌が覗いている。
いつも春樹に向けられていた鋭い眼差しは、今日は伏せられ、春樹の存在に気づかないのかじっと電車が来る方向を見つめている。その様子に、春樹は言い知れないもどかしさを感じた。
出会ってからこれまで、彼女はずっと自分を見つめていたのに、今その瞳は違うものを映している。

俺に気づけばいいのに。

向けられるのが決して好意の眼差しでないと知っていても、春樹は彼女に自分の姿を捉えてほしいと願った。

彼と同じように額に汗を滲ませ、ハンカチでそれを拭う姿が、酷く官能的に見えた。

０４：新学期

春樹が本当に私のこと好きでいてくれるのかわからない。
自分と同じように、春樹が私を好きでいてくれるのか、自信が持てなくなった。

夏休み明け、春樹はそう言って恋人にふられた。
自分は誠実な恋人だったと春樹は思う。初めて異性とつきあう彼女に合わせ、ゆっくりと恋愛関係を進展させてきた。手も握れなかった彼女に、少しずつ歩み寄り、彼女も少しずつそれを受け入れた。
メールや電話をマメに交わし、デートにだって率先して誘うようにしていた。１ヶ月記念、３ヶ月記念には彼なりに工夫を凝らし女の子が好きそうな計画を練り、常に彼女を大切にしてきた。
……つもりだった。

ほかに、好きな人でもいるの？

そういわれたとき、ようやく春樹は心のどこかにいつもあのセーラー服の少女がいたことを自覚した。言葉を交わしたこともない、名前さえ知らない少女に、いつのまにか自分は心を奪われていたのだ。
大きな瞳に涙を滲ませ別れの言葉をつむぐ彼女を見ながら、春樹はどこか他人事のようにそれを受け入れた。

自分は、こんなにも冷たい人間だったのか。

彼女の眼から堪え切れなかった涙が一粒頬に伝って落ちた。

Ｓｌｅｅｐｉｎｇ　Ｂｏｙ（高校生×高校生）

この世で僕の眠気を誘うもの。
春のうららかな日差し。
退屈な現国の授業。
そして、岩城由香里（いわしろゆかり）の声。

「……立花春哉（たちばなはるや）、廊下に立ってなさい」
「ふぁい……」

※※※※

「お前、今月入って何回目だよ、居眠り注意されんの」
「……十五回目、かな」
欠伸をしながら答える僕に、友人は呆れた視線を送ってくる。
「まだ今月も十日しかたってないってのに、お前ってやつは……」
お恥ずかしいことに、一日に二回以上注意されたこともあるのだ。
「そんなに寝不足なのかよ。一体毎晩なにしてんだ？」
ニヤニヤ笑いを浮かべる友人。その笑いやめろ、キモイ。
「んや、寝不足ってわけじゃないんだ。昨日も十時間は寝た」
「むしろ寝過ぎだろ、それ」
お前の方がきもい、と言って顔を顰められた。
「……なんかさぁ。俺、岩城の声聞いてると眠くなるんだよね」
「はあ？」
うららかな春の日差しも、退屈な現国の授業も。
みんな強力な眠気を誘う敵だけど、どれもこれも岩城由香里の声にはかなわない。
彼女の声を聞くと僕は、子守歌でも聞いてるみたいに、途端に睡魔が襲うのだ。

「……ぐぅ」
「寝るなっつーの！」
「はっ！」
ほら今みたいに、彼女が僕の側で話しているだけで眠くなる。授業中の朗読、女子同士の他愛ないお喋り。僕に向けられた声でもないというのに、彼女の声はまるで魔法みたいに僕を眠りに誘うのだ。
「そんなにいい声か？　確かに聞きやすい声だけど。別に他の女子と大して変わんねえだろ」
「そんなことない！　高すぎず低すぎない、いい声だ。俺の耳にどストライク！」
「……お前、声フェチだったんだな」
「いや、そういうわけじゃあないんだけど」
と言いつつも、襲ってくる眠気に、僕はまた欠伸を漏らした。
本当に、なんていい声なのだろう。岩城の声を聞く度、揺りかごに揺られる赤ん坊のように穏やかな気持ちになっていく。

※※※※

「立花君？」
「はっ！」
やばい、また寝てた。
岩城の話を聞きながら、いつの間にか夢の中に身を委ねていた僕は慌てて姿勢を正した。
「ご、ごめん岩城。ええとなんだっけ？」
「あの、だからこのまえクラスでやったアンケート、出してないの立花君だけなんだけど……」
「ああ、そうか。ごめん、今出すよ」
ええと、アンケート、アンケートっと。
ガサガサと机の中をあさった後、皺くちゃになったプリントが出てきた。

「……これだっけ？」
「うん、それ」
ははは、と笑って誤魔化し、僕は手を使ってプリントの皺を伸ばした。
そして、岩城にそれを手渡そうとしたのだが――
「あの、岩城？」
岩城はそこに突っ立ったままで、受け取ろうとしない。
「ええと、岩城、さん？」
様子を窺おうと顔を覗き込むと、岩城はがばっと伏せていた顔を上げた。
「ねえ、立花君て、あたしのことどう思ってるの！？」
「へ？」
突然の問いに、僕は驚いて彼女を見つめ返す。ど、どうと言われましても……。
「正直に言って。あたし、ずっと気のせいかなって思ってたんだけど、立花君てさ……」
一息置いて、そしてまた口を開いた。
「あたしのこと嫌いなんでしょ？」
「はい？」
思ってもみない、そんなこと。
けれど岩城は続ける。
「だって、立花君授業中とかあたしが先生に指名されるたびに居眠りするし、立花君のそばであたしが友達と話してるときだって、鬱陶しそうに狸寝入りしたりして。今だって途中からあたしの話聞いてなかったし……」
「ちがっ！」
「なにが違うって言うの？」
なにもかも、だ。
僕は君のことが嫌いだから眠ってしまうんじゃない！　むしろ心地良すぎて眠りに落ちてしまうんだ。早く何か弁解を……！

けれどどうして。
「……立花君？」
どうして、こんなときまで君の声は心地よく響くのか。
「ぐう……」
眠りに落ちた僕の頬に、バチーン！　彼女の渾身の一撃が食らわされた。
「そんなに嫌なら、もう話しかけない。クラスが同じだから顔を合わせないなんて無理だけど、でもできるだけ立花君のそばに近寄らないようにするわ！」
そうして、彼女はアンケートを引っつかみ、教室を出て行ってしまった。

以来、岩城由香里は宣言どおり僕の前では全く話そうとしなくなった。それどころか、僕に近寄ろうともしない。隣だった席はいつの間にか一番遠い席に移動して、こんなときに限って授業で彼女があてられることもない。おかげで僕は不眠の日々が続くのである。

「どうしたらいいんだ……！」
「いや、いいんじゃねえの？　居眠りしなくなったんなら」
「そんな！　じゃあお前は僕に退屈な授業をどうやって乗り越えろと言うんだ」
「勉強をしろよ、勉強を」
「くっ……！」
もっともな友人の発言に、僕は反論することも出来ず頭を抱えた。
「まあ、不眠うんぬんは別として。岩城に嫌われたくないって言うんなら、素直に理由言って謝ればいいだろ」
「……だって、彼女の声を聞くと眠くなってろくに話しもできないんだ」
「アホか」
僕も激しくそう思う。

「ったく、彼女の声を聞くと眠くなるんなら、彼女が何か言う前に用件を言えばいいだろ。黙って話を聞いてくれとかなんとか言ってさ」
「上手くいくだろうか？」
「さあな」
酷い友人だ。
「でもまあ、うじうじして悩んでる暇があるなら、とっとと放課後にでも呼び出して謝った方が言いと、俺は思うけどね」
それもそうである。
かくして、僕は岩城を呼び出すことに決めたのだった。
放課後の教室。
「立花くん……？」
伝言どおりにやって来てくれた岩城に、僕は全く懲りずに「いい声！」と内心で褒め称えた。
いけない、いけない。今は彼女の声に浸っている場合ではないのである。
「突然呼び出してごめん！」
勢いよく頭を下げると、僕は早口で「まずは黙って俺の話を聞いてほしいんだ」言った。
岩城はこくりと頷いて口を噤む。
「僕は、岩城の声聞くと、すぐに心地良くなって、眠ってしまう。でもそれは決して君のことが嫌いだからとかいう理由ではないんだ」
言葉を紡ぎながら、僕の方が岩城にこんなになにかを伝えようとするのは初めてだと思う。
思えば岩城の話もきちんと聞けた覚えがない。いつもその声に気をとられて、気づけば眠気を誘われていた僕。
今、目の前に佇む彼女は、真剣に僕の話に耳を傾けていた。
「君の声はどうしてか俺にとって気持ちよく響く。春の暖かい日差しのように、赤ん坊をあやす母親のように。まるで催眠術みたいに俺は眠気を誘われるんだ。岩城、」

顔を上げて彼女の目を見つめる。
「なに？」
「岩城、僕は」
小首を傾げる彼女に、僕はどうしてか顔が熱くなるのを感じた。
「ぼ、僕は、その」
「うん」
「ええと、僕は……君が、」
――嫌いじゃない。
我ながら意気地がない言葉を続けると、けれど岩城は「なんだ……」安堵したように笑みをこぼした。
「あたしてっきり嫌われてるとばかり思ってた……でも、嫌われてなかったんだね」
よかった、と嬉しそうに微笑む彼女に、ますます僕の顔は赤く茹っていく。
「じゃあ、これからは話しかけたりしても大丈夫？　あ、でもあたしの声聞くと眠たくなるんだっけ？」
「え、は、いや、えっと。大丈夫！　今後はできるだけ眠らないように努力するから」
言う僕に、また笑みをこぼす岩城。
久々に聞いた彼女の声はやはり耳に心地良く。
けれど何故か眠気とは違う感情が湧き上がってくるのを感じる僕だった。

春にまどろむ（貴族の少女×奴隷の青年）

――夜を抱く瞳。
垢まみれの頬を、小さな白い手が包む。
檻の向こうの人間は、皆自分たちを“物”のごとく眺めていたのに。
ぱっちりと大きな瞳に覗き込まれ、ただ戸惑いばかりが生まれて消えた。

※※※※

「かーいとぉぉぉ！」
うとうとと空を見上げていた視界に、春らしい桃色が飛び込んでくる。
ふんだんにレースが用いられた、少女に似合いの可愛らしいドレス。
「……シエラ」
遠慮なしに体当たりしてくる小さな身体を抱きとめ、名を呼んだ。
「カイト！　見つけた」
にっこりと笑う少女は確か今年で十四になるというのに、幼い頃とまるで変わらない。
女性らしいしなやかな身体つきへと変化する外見とは反対に、中身は出会った頃そのままのように思えた。全く慎みの欠片もない振る舞いに、侍女頭のマーサが頭を抱えるのも分かる気がする。
「シエラ、勉強は？」
「えへへ」
耳を澄ませば屋敷の方から甲高い声が聞こえてきた。
「また抜け出してきたのか……」
今頃屋敷の者たちが必死になって少女を探していることだろう。

呆れる視線を無視し、シエラはいそいそとカイトの横に寝転がった。
「少しの間かくまってちょうだい」
上目遣いで言うシエラに、カイトはなにも言わず腕を差し出し、枕を提供した。

※※※※

人を売り買いする奴隷市場。檻に入れられ、檻の外の人間に“商品”として認識される青年は、貧しい村の生まれだった。
食べるものがない、親もいない。腹が空いたら人から奪い、そうしなければ生きていけない世界に、彼はいた。ある時ヘマをして奴隷商人に捕まってから、こうして“商品”として人々の前に晒される。
男のドレイは力がある。消耗品のように、休みも食事も満足に与えられず働き続ける日々が待っているはずだった。
「夜色の瞳」
ただ地獄を待ち続けるしかなかった青年に、幼い少女の声が聞こえてきた。
少女は、後ろから制止しようと追いすがってくる保護者の手をすりぬけ、青年の前までやってくる。
「おいおい、おい嬢ちゃん。商品に触られちゃ困るよ」
「夜色の瞳」
眉を寄せる商人を無視して、少女は手を伸ばす。
「夜を抱く瞳ね、なんて綺麗な蒼なのかしら」
「おい！」
青年の頬に触れた手を払おうと、商人の怒声が響く。
「シエラ」
次いで、少女の保護者の声も聞こえた。
「叔父様！」

シエラは青年の手を握り、後ろに控える叔父を振り返る。
「私、彼が欲しい！」
玩具をねだる子どものように、彼女は声を上げた。

※※※※

それから三年。
シエラは十で両親を亡くし、その一年後、カイトに出会う少し前には慕っていた幼馴染の少年を事故で失った。
カイトが売られていた市場を通りかかったときは、後継人となった叔父の家へ連れて行かれるところだったそうだ。
カイト、という名前はシエラがつけた。
何も持っていなかった青年と、全てを失った少女。
カイトから見れば住む場所があり、食事に困らず、叔父という、守ってくれる存在のいるシエラは、なんて贅沢なんだろうと思った。
夜、両親を思い出して泣くシエラ。
深い蒼の瞳を持つカイトを「夜を抱く瞳」と称し側に置くくせに、夜が怖いと涙を流す。
両親がいないのはカイトも同じだったが、父が恋しい、母が恋しいと嘆いたことなど一度もなかった。そんな暇、なかった。余裕など、なかった。生きていくだけで精一杯。他者を陥れ、その日その日己の命をつないでいく。

三年の月日、与えられたぬるま湯のような生活にほだされてしまったのだろうか。
いや、出会った当初から、カイトはシエラをどこか神聖なもののように見つめていた。
己にはない感情を持ち、何一つ穢れのないまっさらな少女に、侵し難い何かを感じているのだろうか。

※※※※

カイトの腕の中で眠る少女は、いつか大人となり、この身から離れていく。

貴族の娘であるシエラと、奴隷身分であるカイト。ずっと一緒にはいられない。

遠くはない将来、自分のもとから去っていく少女を抱き寄せ、カイトは彼女と同じように目を閉じた。

月明かりにうたう（貴族の少女×奴隷青年　第二話）（前書き）

『春にまどろむ』の続編です。またも短め。

月明かりにうたう（貴族の少女×奴隷青年　第二話）

「シエラ」
優しげに自分を呼ぶ声、愛しげに頭を撫でてくれる手。
ぬくもりは全て過去のもの。
愛情を知らなければこんなにも苦しむことはなかったのだろうか。

※※※※

シエラは一人、夜の廊下を歩いていた。
屋敷の者に見つからないように、ひっそりと足音を抑え注意して進む。向かう先には、三年前、彼女が購入した奴隷青年の部屋がある。
シエラと同じように広い部屋を与えられ、同じように綺麗な服をきて、同じ食事をする。
奴隷から一転、まるで貴族のような生活を許される彼を見て、周囲の者は眉を顰めた。
「シエラお嬢様はあの幼さで奴隷を買われているらしい」
「まあ、なんてふしだらな」
「綺麗な衣服を着させて、お人形遊びのつもりなのだろうか」
「いくらご両親が亡くなられたからといえ、奴隷に家族ごっこをさせるのはいかがなものでしょう」
「ご成長あそばされた後、男を飼っていたなど世間に知れたら、嫁の貰い手がありますかしら」
口々に勝手なことを言う者たちに、けれどシエラは気にすることもなくカイトを慕った。
奴隷の身分であったのに、傲岸不遜。
主であるシエラに決してへりくだった態度をとることなく、堂々とした様子で彼女に接する。

そのことがまた、周囲の反感を呼ぶのだが、シエラは反対に嬉しかった。
両親を亡くし、慕っていた幼馴染までこの世を去った。
叔父は仕事が忙しく、幼いシエラを置いて外に出かけていることが多い。赤ん坊の頃に会って以来顔を合わせることのなかったせいか、どこか他人然として、甘えることが躊躇われた。

「カイト、寝ちゃった？」
光の漏れる部屋に、それでも念のため確認する。
「シエラ？」
少しして、扉が開き、驚きを宿した夜色の瞳が自分を見下ろした。
「眠れないの。眠くなるまで一緒にいていい？」
問いかけるも、答えを待たずに部屋に入り込んだ。背後では予想通り、一つ息を吐く音が聞こえ、次いで扉が閉まる音が続く。
「侍女頭がまた怒り出すぞ」
「大丈夫。ちゃんと私からこの部屋に来たっていうから。カイトは何も悪くないって」
「……それも、どうなんだろうな」
「え？」
首をかしげるシエラに、カイトはベッドの横に置かれたテーブルの上を見る。
薄っぺらで、簡単な文字で綴られた物語の本が乗せてあった。
この屋敷に来て、少しずつ読み書きを覚えだしたカイトに、シエラが記念に贈ったものである。
「私が来るの、眠らずに待っていてくれたの？」
嬉しくてカイトを振り返ると、恥ずかしいのか、乱暴に布団をかぶせられた。その後、カイトもシエラの横に寝転がる。
大きなベッドは、カイトが屋敷にしてしばらくの後、あまりにも自分の部屋を抜け出し彼の部屋へ訪ねていくことの多いシエラのために、叔父が渋々新調してくれたものだ。

三年の月日を経、成長した二人が横たわっても、充分に余裕がある。
十八歳のカイトと、先日十四になったシエラ。
大人になりかけの彼らが、一つのベッドで眠りについていると知ったら、周りの者たちはなんというだろうか。

「カイト」
「ん？」
「子守唄、うたってあげようか」
眠れないといって部屋を訪ねてきたのはシエラだったのに。
けれどカイトは問い返すことなく頷いた。

シエラがうたうのは幼い頃彼女の母がシエラにうたってくれた歌。
もういない母の優しい声を思い出しながら、記憶をなぞるようにメロディーを口ずさむ。

仁さんとあたし - 喫茶店と進路 -（女子高生×２８才喫茶店経営者）

高岡仁（たかおかしのぶ）さん（ジンさん、じゃなくてシノブさん、だ）は、母の友人、知子（ともこ）さんの弟だ。私より十一歳上の二十八歳で、駅の近くに店を構える喫茶店のマスターをやっている。

仁さんのお祖父さんが趣味で開いたというその店は、昼は喫茶店、夜はバーとして馴染みのお客さんに親しまれている。というか、駅に近い割には一本奥まった道にあるせいで新規のお客さんが立ち寄ることはほとんどない。隠れ家的といえば聞こえがいいけれど、常連さんがいなければやっていけない、むしろ常連さんがいても赤字すれすれの経営状態で、常連客の中では密かにいつ店が潰れるか賭をしている人もいたりする。

そんな店だから、私は週に何回か売上に貢献するため店に通っている。といっても所詮は高校生の小遣いの範囲内。私が通ったところで経営がどうにかなるわけじゃないのだけれど、なにもしないでいるよりはマシだろうと、せっせせっせと足を運んでいる。

しかし、当の仁さんは喫茶店の売上げなどあまり気にしていないようだ。趣味の株で儲けてはそれで店の赤字を補っている。どうやら喫茶店の経営よりもそちらのほうに才能があるらしい。マイナスだった売上げを、株の儲けでプラマイゼロどころかプラスにしてしまうところ、すごいとしかいいようがない。株が趣味なのか、それとも喫茶店が趣味なのか、一度尋ねてみたいものである。

「そりゃあ、喫茶店の経営が本業なんだと思うよ……多分」

語尾で大分自信がなくなったね、龍治（りゅうじ）くん。

気まずげに目をそらす彼は、この店唯一の従業員、宮澤龍治（みやざわりゅうじ）くんだ。仁さんの二つ下の二十六歳で、お祖父さんの代からこの店で働いている。中卒でそのまま働きだしたらしいから、従業員歴かれこ

れ十年になるはずだ。のに、料理や紅茶、コーヒーを淹れるセンスは今一つ。先ほど淹れてもらった紅茶は、一口飲んだきり、すっかり冷めている。

「なあ、そんなにまずい？」

「うん」

自信なさ気に聞いてくるのを、バッサリと斬ってやる。ガックリ肩を落とす彼を哀れに思わないこともないけれど、はっきり言ってやらなきゃいつまでたっても伸びはしない。龍治くんは私が残した苦くて薄い紅茶を飲みながら、うーんと首を傾げた。

「今日はうまくいったと思ったんだけどなあ」

でたよ、お決まりのセリフが。その紅茶の、いや、紅茶のなり損ないのどこがうまくいったと思うのか。薄いのに、渋みが強くて苦い。香りと色だけが辛うじて紅茶らしさを主張しているけれど、間違っても美味しいなんていえたものじゃない。普段仁さんの、逆の意味でびっくりするほど美味しい紅茶を飲んでいるから、尚更だ。

それなのに、龍治くんはいつも「今日はうまくできた」なんて言って嫌がる私に味見をさせる。その度に私は騙された、と彼を恨みたくなるのだが、本人は嘘をついたつもりはなく本気でうまくできたと思っているから手に負えない。彼の味覚はどこかイカれてしまっているんじゃないだろうか。常々不思議に思っているのだけど、口に出したことはまだない。

龍治くんは相変わらず首を傾げたまま、すっかり飲み干して空になったティーカップを洗い始めた。

店内にお客は私だけ。夕方という中途半端な時間だから仕方ないのかもしれないが、これがたとえお昼であったとしても人気のなさ

は変わらないのだろう。あまりの客の少なさに、店主は役に立たない従業員一人残してどこかに行ってしまっている。気だるい外国の音楽と、カップを洗う水音をＢＧＭに、私は一人まぶたを閉じた。

「里穂（りほ）、りーほ、ほら起きろ」

ゆさゆさと揺さぶられる振動に、私は「んん……」と唸って目を開いた。

眠る前に真っ赤に染まっていた夕焼けは、いつのまにやら濃紺の夜空へと塗り替えられている。ごつごつした大きな手の平にぺしり頭を叩かれて、私はその手の主を見上げた。

「仁さん、おかえりぃ」

「はい、ただいま」

パチンコにでも行っていたのか、仁さんは戦利品の中から板チョコを取り出して私に放る。種類は私の大好きなイチゴ味。小さい頃から変わらず大好物のそれを、仁さんは「里穂はいつまでたってもお子様だなあ」と笑いながらも、いつも私が来るときは用意していてくれる。明るい茶髪に少し近寄りがたい容姿の彼だけど、私には優しく甘い良いお兄さんなのだ。

「店に来るのは別にいいけど、お前ちゃんとママに言ったか？」

「言っ……たよう」

「嘘付け。さっき由里（ゆり）さんから俺んとこに電話きたぞ」

由里、つまりはうちのママから電話があったなら最初に言ってくれればいいのに。試すような質問はずるいと思います。と目で訴えれば嘘をつくほうが悪いとデコピンされてしまった。仁さんのデコピンは物凄く痛いのに。酷い。

「さ、送ってってやるから帰るぞ」
「ええー」
「なにが『ええー』だ」

声真似しないでよ、キモチワルイ。

「だって、まだ仁さんの紅茶飲んでない！」

お客としてきたのだ。龍治くんのまっずい紅茶は飲んだけど（正直、飲みたくなかったけど）、やはり喫茶店に来たからにはマスターの美味しい紅茶を飲みたいじゃない。ちゃんとお代だって持ってきたんだよ。

「……しょうがねえなあ。これ飲んだらちゃんと帰れよ」

流石仁さん！　甘やかし上手！

なんて口に出したらまたデコピン食らうこと間違いなしなので、イエッサーと敬礼だけしておいた。それでも「調子いいやつ」と苦笑はされたけど。

ヤカンで水を沸かすところから始める仁さんに、私はさっきもらったイチゴチョコを食べながら待つことにした。じきに、シュンシュンとお湯が沸く。それを茶葉の入ったポットに入れて、しばし蒸らす。ゆったりと流れていく時間と、手際いい仁さんの動きを眺めるのが、私は好き。

紅茶の香りに癒されて、仁さんの話術に心を軽くする。

この店に来る常連さんが、やる気のない経営者に呆れつつも長年通い続けるのは、そういった魅力があるからかもしれない。

「お前さ、」

出来上がった紅茶をカップに注ぎながら、仁さんが言った。

「なに？」

紅茶を受け取りながら首をかしげると、「あー、えっと」仁さんは少し気まずげに頭をかいた。

それから、少しして口を開く。

「進路、どうすんの」

躊躇ったわりにはストレートな問い。

どうするって言われてもなあ。高校二年の三学期。そろそろ卒業後の進路に向けて準備をし始める時期だ。周りの友達が大学進学や就職、留学なんかを考える中、私は何の考えも浮かばずにいた。どこの大学に進学するとか、どの企業に入りたいだとか、そういった具体的なことは皆まだ決まっていないけれど、でも進学か就職かさえも、私は決められずにいるのだ。

先日、進路調査表を配られた。

真っ白な未来に、突然予想図を描けと言われてもさっぱり思いつかない。帰宅後に待っている両親との話し合いを避けて、逃げるように仁さんの店に避難してきたのだ。

「どうしようかな」

仁さんの質問に、へらりと笑いつつも本音で返す。内心どきどきしながら応答を待っていると。

「まあそうだよな」

仁さんの気の抜けた声が聞こえてきた。

「あんまり気負うんじゃないぞ」

ぽんと頭を撫でられ、その後「どこにも行く場所がないんだったら、俺の店で雇ってやるよ」なんて冗談をいう。

「私、こんなに上手に紅茶淹れられないよ？」
「大丈夫、大丈夫。唯一の店員龍治があんなんだから」
「それに、接客も上手くないし」
「そぉかぁ？　常連の客とよく話し込んでんじゃねーか」
「仁さんこれ以上従業員増やしたら店潰れちゃうんじゃない」
「それは、大きなお世話だ」

へへへ、と笑い口に含んだ紅茶の味は、やっぱり極上なのであった。

１４ｄａｙｓ（二十三歳売れない恋愛小説家♀×関西弁少年）（前書き）

エセ関西弁注意です。
至極適当な関西弁になっております。苦手な方はお逃げ下さい。

１４ｄａｙｓ（二十三歳売れない恋愛小説家♀×関西弁少年）

その夜、絵理子は酔っていた。担当さんとの打ち合わせで、新作の小説をリアリティがないだの、ありきたりすぎるだの、さんざんこき下ろされた帰りだった。いつものことだけど、いやいつものことだからこそ毎回同じことを言われながらも尚それにしがみつくしかない自分が情けなくて、飲まなきゃやってられなかった。

「リアリティがないだとー、当たり前じゃないかぁ、ヒック、彼氏いない歴２３年、年齢とイコール、独身ですよ〜っだ」

ふらふら定まらない足取りで駅前を歩きながら、絵理子は一人、誰にともなく愚痴りだした。周りから変な目で見られても構わない。……と言うか深夜一時の今現在、周りは自分と同じ酔っ払いばかり。構わないもなにも、みんなそれぞれ浮かれて騒いで、絵理子の独り言など夜の喧騒に紛れて消えていく。

「くそー、柳川め。男作れなんて簡単に言いやがって。それができたらとっくにしてるっつーの！　あ〝ー男ほしー！」

ヤケクソとばかりにそう叫ぶと、その声は思いの外周りに響いた。消える喧噪、シンとなる場。ふいに我に返り叫びと共に振り上げた右腕をそっとおろす。酔いが少しさめてしまった。

コホン

咳払いをしてその場を立ち去ろうとした絵理子の耳に、クッ、とのどを鳴らす音が聞こえた。勿論自分のじゃない。横を見るとベンチに腰を下ろした青年――いや、少年、か？　――が、腹を抱えてうずくまっている。ふわふわと色素の薄い猫っ毛が肩と一緒に小刻みに揺れていた。

笑われている。しかもかなりツボに入ったご様子だ。時折堪えきれなくなった声がクク、と口から漏れている。

……か、帰ろ

恥ずかしくなって逃げようとした絵理子を、しかし再び横の方か

ら聞こえてきた声が引き止める。
「ちょお、お姉さん。待ってや」
そのまま無視して通り過ぎてしまえばいいのに、あまりにも好みな声と喋り方につい足を止めた。猫のように間延びした関西弁。男の子にしては低すぎない、ハスキーな声はすとんと耳に落ちて心臓を刺激した。顔を見ずに立ち去るのは勿体無い。羞恥心より乙女心が勝った。
「良かった、立ち止まってくれて」
振り向いてのぞいた顔もこれまた好み。少年はベンチから立ち上がると、ゆっくり絵理子の方に近づいてきた。ひょろりと長い体格で、絵理子を見下ろすように立っている。身長はだいたい１７０センチ後半といったところか。つり目を細くしてにっこりと笑みを浮かべている様子なんか、どストライクである。こういう猫系の男子に、とてつもなく弱いのだ。あと、関西弁にも。
「お姉さん、面白いなぁ」
「なに、急に」
ナンパだろうか。でもこんな美少年があたしに？　ないないない。しかもナンパ相手に面白いはおかしいでしょ。
「名前、なんて言うん？」
「絵理子」
名前を聞かれてあっさり答えてしまった絵理子。普段だったら絶対にそんなことをしないのだが、いかんせん最初に述べたように彼女は酔っていた。さきほど一瞬さめかけた酔いは、美少年の出現であっという間に舞い戻ってきたのであった。
「絵理子さん、ええ名前やね。一人暮らし？」
「うん」
流石にその質問はヤバいだろ。しかしアルコールの回った頭は正常な思考をすでに放棄しており、口から出てきた言葉はあっさりとそれを肯定する。
「そうなんや。ええなぁ一人暮らし」

「そうかなぁ、うふふ」
好みの顔に言われてすっかり上機嫌だ。
「……ところで絵理子さん、お願いがあるんやけど」
「なに？」
「僕んこと飼ってくれる？」
飼う？　それは犬や猫みたいにペットになりたいということか……？　絵理子の思考回路が破綻してると同様、目の前のこの子も少しおかしいらしい。酒のにおいこそしないけど、彼もどうやら絵理子と同じ酔っ払いの一人のようだ。
「いいわ」
突然の申し出に、絵理子は考え込むことなく首を縦に振った。酔っ払い同士の戯れ言は、深くつっこんでも意味がない。所詮明日になれば消えてしまう夢なのだ。考えるのは酔いがさめてから。今はただ、心地よさに身を任せ、自分も戯れ言を吐くまでである。
「いいわよー飼ってあげても」
「ほんま？」
「ほんまほんま、だけど条件がある」
「ええよ、なに？」
そう言われるのは予想してたのか、少年は特に驚くことなく聞き返す。ちょっと傾げた首がこれまた可愛らしい。その様子にえへへ、と口元をゆるめた後、絵理子は恥ずかしげに口を開いた。
「代わりに、あたしの処女貰ってくれる？」
喧噪あふれる駅前は、いつのまにやら人もまばらに、広場の真ん中に置かれた時計は深夜二時を告げようとしていた。

※※※※

翌日。
頭が痛い。いや、重いという表現のほうが合ってるかもしれない。のどがからからで、起き上がろうと目を開くと太陽の光が目をさし

た。
「うぅ……」
かすかに吐き気も感じられる。口の中が乾いてアルコールのにおいがする。完全な二日酔いだ。だるい体をなんとか起こしてキッチンに向かおうとするが目は半開き。ふらふらふらふらさまよいながらようやく流しにたどり着くと、すっとコップ一杯の水が差し出された。
「あ、ども」
なんのためらいもなく水を飲み干すと、霞がかった脳内がすっきりしたような気がする。そして、すっきりついでにおかしなことに気がついた。
「……今の、誰」
この手の中のコップ（もう水は入っていないが）を差し出したのは一体誰。恐る恐る横を振り返ると、見ず知らずの男性……少年？
が笑顔を浮かべてこっちを見てる。
「ぎゃあ！」
驚いて飛び退くと、そこは狭いキッチン、ガタンと音を立てて食器棚に頭をぶつけた。
「う……いったぁ……」
頭を抱えてうずくまる絵理子の正面に、さきほどの少年がしゃがみこむ。ぐっと近くなる距離感に、なんだか危険な感じがしてしまう。
「お姉さん、ほんま面白いなあ」
クッ、とのどを鳴らすように笑われて、顔が赤くなる。無様なところをみられた羞恥心。それと、予想外に好みな声と喋りに、最近はめっきり死滅していた乙女心を刺激されたため。よくみれば顔も好みだ。整った顔立ちに、猫のようにつりあがったつり目が印象的。明るい茶色の猫っ毛はところどころ赤や焦げ茶のメッシュが入っていて、三毛猫を擬人化したらこんな感じかな。頭の片隅でそんなことを思いながら、瞳は更に目の前の人物を観察する。ひょろっと長

い体躯は、しかし程よく筋肉がついていて、バランスの取れた裸体が……ん？　裸体？

「って！　なんで上半身裸なの？！　……いっつ！」

叫ぶと共に、飛び退いて、絵理子は再び食器棚に頭をぶつけた。打ち所が悪かったのか今度は酷く痛くて、目に涙が滲んだ。

「あー、気ぃつけや……」

気遣うように言うけれど、その声には明らかに笑いが含まれていた。現に愉快そうに笑みを浮かべているし、その上絵理子とはまた違う意味で涙目だ。

「お、おかまいなく……」

打ち付けられた後頭部をさするべく伸ばされた彼の手を、やんわりと辞去。

水の入ったコップを渡してくれたり、気遣わしげに様子を窺ったりと、まるで親しげな恋人か友人のような態度の彼。しかしまるで見覚えがないのは気のせいだろうか。いやそんなはずはない。二日酔いといえど頭ははっきりしているし（さっき水を飲んだから）、二度ほど後頭部をぶつけたけれど、記憶をなくすほどの衝撃じゃない。まあ、若干昨夜の記憶が抜けているが、それ以前の記憶はしっかりばっちり覚えてる。

……ということはつまり、朝チュンてやつ？

確かに昨日は荒れていた。担当の柳川に新作の小説を散々こき下ろされて、やけになっていたのだ。いつもは全く飲まない酒をガンガン飲み干し、珍しく泥酔状態に。そして気づけば見ず知らずの男の子と……いやいやいや。まだそうなったとは限らない。たとえ目の前の彼は上半身裸で絵理子はキャミとパンツ一枚の下着姿であろうとも（って、あたし下着姿なの！？　ギャー、見ないでー）、万が一っていうこともありますし。そもそもこんな美少年があたしみたいなの抱くだろうか。

散々考え込んだ挙句、意を決して聞いてみることにした。

「……あの、つかぬことお聞きしますが」

「ん、なに？」
「その……あたし、っていうかあたし達、し、してない、よね？」
「なにを？」
「え？　……あー、えっと、そのぉ、セッ……クス……を、」
「あぁ、まだしてへんよ」
「本当？！　……て、“まだ”ってなに？」
「なに、言われても。お姉さん昨日言うたやん、僕んこと家に置いてやるから、そん代わりに処女もろてーって」
……は？　いやいやいや、そんなこと言うはずないでしょ。第一、あたし関西弁じゃないし。
呆ける絵理子を差し置いて、少年は言葉を続けた。
「昨日はお姉さん、ベロンベロンに酔ってたから、まだ未遂やけど。直に頂こうとは思うてるよ」
「そ、そんな約束、覚えてない！」
「覚えてなくても、したんや」
「なかったことにして！」
「うん？」
「その約束。第一、覚えてないんだから無効よ！」
無効無効！　絶対に無効！
そう言い張ると、少年はちょっと考えて、ジーンズのポケットから一枚の白い紙を取り出した。
「……なに？」
「ええから、読んで」
「……？」
しかたなく絵理子はそれを受け取り、四つ折りにされていた紙をひらいた。
「なにこれ、きったない字」
そこにはふにゃふにゃとした、けれどどこか見覚えのある文字が書かれていた。
「ええと、『わたし、佐伯絵理子は、少年ナオを家に置いてあげる

ことを誓います』な、なにこれ！　本当になにこれ！」
驚いて目の前の少年を見上げると、少年は「最後までちゃんと読んでや」といって続きを促した。
「……『そのかわりとして、ナオはあたしの小説のネタを提供するとともに、あたしの処女を貰うこと！　以上』」
はあああああ？！　なんだこれ
しかし書かれている文字は（かなりきったないが）たしかに絵理子ので、ご丁寧に判子まで押してある。
驚きすぎて、呆然とする絵理子に、ナオはにっこり笑って「これから、仲ようしてや」と囁いた。

雪解け（雪女×少年）

毎年冬の終わりには珍客がやって来る。

名残雪が降り始めると、雪女がコンコンと窓をたたいて早く中へ入れろとせっついてくる。

そう、冬の終わりの珍客とは雪女のことなのだ。

春も近づき今季の命も尽きる頃、彼女は毎年冬哉のもとにやってきては半分溶けながらコタツに入り、ミカンを食べては文句を言いつつ消えていく。

変な妖怪だな。冬哉は最初そう思ったが、けれど何故だか気に入ってしまい、毎年家に招き入れている。雪女、といっても人を凍らせたりはしない。前に聞いたらそう言うのは趣味じゃないのだと言っていた。

雪女との逢瀬は短い。彼女は雪だからだ。コタツで温まるうちに溶けてしまう。

けれど彼女自身はこれまた変わったことに寒がりだそうで、冬の終わりくらいコタツで温まりたいとこぼしていた。どうせ春がきて雪解けが始まったら自分も一緒に溶けるんだから、いまここでそうなっても大差ないことだ。彼女はそういって笑う。

短い時間に、二人は他愛ない会話をしたり、ときにはただ二人じっとしていることもあった。せっかく一年に一度の逢瀬なのだから、もっと色々話せばいいのに、けれど長年連れ添った友か夫婦のように二人はただ穏やかにその時を過ごした。

ゆっくりゆっくり流れていく時間。雪女はゆっくりゆっくり溶けていった。

雪女には名前があった。雪女はみな一様に雪女という名前かと思ったら、どうやら人間と同じで個々を識別する名前があるらしい。どんな名前かあててみろ、というので、冬哉は雪とか雪子とかと答

えたら、ナンセンスだ、といってみかんをぶつけられた。

私の名前はサクラ。

すてきな名前でしょう。

そういって彼女が笑った時、冬哉は彼女のことをやっぱり変な雪女だと再確認した。寒がりで、コタツが好きで、名前はサクラだなんて。まるで人のよう。

思ったままにそう伝えると、雪女はきょとんとした表情でだってあたし元は人間だもの、なんて重大な情報をあっさり暴露した。

驚く冬哉をよそに雪女はやっぱり笑って人間だった頃のことを話し出した。

彼女は冬哉同様この町に住む普通の女の子だったらしい。黒髪を腰のあたりまで靡かせて、白い肌に色づいた頬がそりゃもう愛らしかったのよ、と彼女は話す。

今でも彼女の長い黒髪や白い肌は美しいけれど、色づいた頬だけが欠けているのが、冬哉は少しばかり残念な気がした。彼女は本当に、それこそ雪のように真っ白なのだ。死んだ瞬間時間を止めてしまったように、体温の感じられない体。

美しいと評判だった彼女は、けれど恐ろしく体が弱かった。季節の変わり目は必ず風邪を引き、家の外に出たことも数えるほどしかなかったらしい。医者は２０歳まで生きることはできないだろうといい、両親たちはそれを悲しんだ。

ある雪の日、彼女は雪女に出会った。ひどく美しく儚げな雪女だった。彼女はその日も熱を出し、寝込んでいたのだが、なんとか布団から起き出して、庭にたたずむその雪女のほうに近寄ってみた。

「そこでなにをしているの？」

縁側に座ってそう尋ねると、雪を見てるの、と答えが返ってきた。

「楽しい？」
「まあまあ」

こんな会話をポツリポツリと交わしているうちに、雪が止み、雲間から太陽が差し始めた。

「そろそろ行かなくちゃ」

雪女は言った。

「どこへ？」
「雪のあるところ、雪が降るところ」
「私もいっていい？」

なぜかサクラはそう聞いていた。
寒いのは嫌い。雪も、降る度に熱が上がるから嫌い。でも、どこへも行けず、このまま一人寂しく死んでいくのはもっと嫌だ。

そして彼女は、雪女になった。

幾年月を超えて冬の間だけを生きる。雪の降るところならどこへでもいける。見たことのない風景。行ったことのない場所。あの時あのまま死んでしまったら、出逢えなかったものたちに逢える。
けれど、目に映る風景はいつもいつも真っ白な雪景色ばかり。春になれば溶けてしまう体。自分の名前の由来でもある桜はもう二度とその花が咲いているのを見ることはできない。

気づけばいつも凍えている。
気づけばいつもひとりぼっちだ。

切ない。寂しい。悲しい。

そんな思いを抱えつつ、数え切れない冬を越えてきた。

そしてある日、冬哉に出会った。あの日、雪女に会った自分のように、冬哉は庭にたたずむサクラに声をかけた。

「なにしてるの」

「雪、見てる」

「面白い？」

「まあまあつまらない」

「なんだそれ。ねえ、寒くないの？」

「寒い」

「中、入る？コタツあるけど」

雪女にコタツあるよ、なんて変な招き文句よねぇ、なんて彼女は笑った。けれど、それで招かれる雪女も相当可笑しな雪女だ。

話をしている間にも、大分温まってしまったのか、ミカンをつまむ彼女の指はぐずぐずに溶けていた。あら、そろそろかしらねぇ、彼女は指が完全に崩れ落ちる前に残りのミカンを口に頬張った。

もごもごと口を動かしつつも溶けていく彼女を冬哉はなんとなく引き止めようとした。けれど彼女は冬哉が何かいう前ににこりと笑って、また来年ねと言って消えた。

今年も冬哉はコタツにミカンを用意して、風変わりな雪女の訪れを待っている。

携帯電話と音信不通（彼氏×彼女＊バカップル＊短め）

「この夏、携帯電話があたしの嫌いなものにめでたく殿堂入りしました。はいパチパチー。何が嫌いって？　まあ、その色々あるんだけど。順に挙げていくとすれば、まずメール。面倒じゃないですか？　小さな面積のボタンをカチカチって親指で打つの。ちょっと無理があるよね。一応あたしも今時の女子大生やってますけど、残念ながらメールの早打ちなんてできた試がありません。早く打とうとすると指がつりそうになんだよね。あと絵文字なんかもいちいち入れるの面倒じゃないですか。え、入れなきゃいいって？　ばっか、絵文字を入れないがためにいじめが起きた、なーんてなこともあったそうな。や、マジマジ。本当の話です。最近の若者は怖いね。あー、あと、メール以外にもそのほか色々な機能がついてますが、使わないしね。はっきりいって無意味。携帯電話の本質は電話でしょうが！　って、あたし電話も嫌いなんですよね。いきなりピリリリリ！　って音が鳴って、出ない限りもしくは相手があきらめない限り延々鳴り続けるんだよ？　やってらんない。出ればいいって？　それもそうかもしれないけどさ、どうせ馬鹿男からの謝罪のお電話でしょ。大抵、昨日一緒にいたのはただの友達で、なんにも関係ないからな！　なーんて見え透いた嘘の羅列ですよ、そんなのいちいち出てられるかっての。かけて来てほしいときには一切ならないしさぁ！　彼女の誕生日に電話一本も無いってどういうこと？！　どういうことなんですか、本当。あーむかつく！

……以上が携帯を水没させた理由です」

一気に言い終えたせいでのどが渇いたあたしは、目の前に置かれた麦茶をぐいっと飲み干し、ダン！　と音を立ててテーブルに戻した。目の前の男に少しでもあたしの怒りを示すための行為なんです

が、え？　子供っぽいって？　知るか、そんなの。

「そんな理由で折角人がやった携帯使えなくしたのかよ」

「そんな理由？」

ここまで腹を立ててるって言うのに、彰人はなんら気にしないご様子でこちらを見上げていた。その上、顔に笑みまで浮かべている（なんて、ムカツク、男！）。

「何笑ってんのよ！」

怒鳴れば、より一層口の端を緩める（え、エムですか……）。

「やー、愛されてるなあと思って、俺」

「は？」

意味が分からず首をかしげるあたしに、彰人は

「つまり、俺からの着信が入らない携帯なんていらないってことだろ？」

と言って首をかしげ返してくる。

「……頭痛くなってきた」

一体全体、今までの話をどうまとめたらそんな結果になるんだろう。一歩間違えば別れ話だって切り出すところだっていうのに、どうしてこの男はここまで能天気なのよ。

「俺も好きだぜー、唯！」

「ちょ、こっちくんな！」

まだ許してないんですけど！

嫌がるあたしに構わずに、彰人は両手を広げてこちらに寄ってくる。

浮気を疑ったり、電話やメールが少ないことに文句を言うのはいつもあたしの方。

イライラを募らせるあたしに、彰人はいつも「愛されてるなあ」なんて笑顔を浮かべるのだ。愚痴を言って、責めているというのに、「俺も好きだぜ」なんて言って抱きついてくる。この人、本当にどっか頭おかしいんじゃないだろうか。

「唯」

「……」

それでも、名前を呼ばれて手を差し伸べられると無視できなくて、結局彼の腕の中に納まってしまうあたしも、どこか頭がおかしいのかもしれない。

結菜と怜（お嬢様×下僕（？）＊超短め＊Ｒ１５）（前書き）

短いです！１１００字。そして微エロ。苦手な人はご注意下さい。

結菜と怜（お嬢様×下僕（？）＊超短め＊R15）

「う、わ」

怜が扉を開けた直後。

片手はドアノブを握り、もう片方は扉のすぐ横の壁に置いたまま。両手を広げた状態の怜の胸元めがけて、結奈は思い切り突っ込んだ。予想外の衝撃に、なんの身構えもせずにいた怜の体はそのまま後方へ倒れ込み、怜は尻餅をついた。もちろん、怜に抱きついた結奈の身体もろとも。

「結奈さん？」

未だ状況が把握しきれない怜は、困惑しつつも彼女の名を呼ぶ。それに応えようとしたのか否か、結奈は顔を上げて怜の瞳を覗き込んだ。

「あの、なにを……」

何も言わない結奈に、再び怜が声をかけるが、結奈はそれも無視して、目の前にさらけ出された彼の白い首筋に顔を埋めた。部活から帰って間もないからだろう、汗と土の香りがする、怜の、匂い。

少しベタつくそこに、結奈はそっと舌を這わせる。

「っ……」

と、怜の体がビクンと微かにはねた。顎の下辺りから鎖骨までを、舌先でするすす、となぞり、鎖骨まで行き着いたところでちゅ、と音を立てて口を離す。

「怜」

上目遣いで怜の表情を窺うと、彼は常には見たことのないほど頬を赤く染め、そっぽを向いていた。何かに耐えるように寄せられた眉間は艶っぽく、結奈は惹かれる様に彼の名を呼んだ。

「怜」

「……はい」

背けられていた視線が結奈へ戻ってくる。それが嬉しくて、結奈

は怜の口の端ぎりぎりにちゅ、と軽くキスをした。
「ゆ、なさ……」
はあ、と洩れる吐息がこれまた色っぽく、女の自分よりも綺麗だと結奈は思った。それまで怜の背中に回したままだった手を一旦解き、右手を彼のネクタイに移した。シュル、と心地良い音を立ててネクタイが外れる。青と銀のボーダーのそれを、しばし考えた後怜の両手に絡め拘束具の替わりとした。自分が縛られることに少しの抵抗をしたものの、思ったよりもあっけなく怜は両手を差し出してくれる。もっとも、怜と結奈の関係では逆らうことなど許されないのだが。
「怜、服脱がしていい？」
言いながらYシャツのボタンを外していく。元より返事など気にはしていない。怜は結奈の玩具。結奈の言う事に逆らう権利など、彼にはありえない。特別頭がいいというわけでも、容姿が優れているというわけでもない、他から見ればただの小娘にしかみえない結奈は、しかし、大企業を経営する父という後ろ盾を持っていた。六歳のとき、留守がちな両親が一人ぼっちの娘に与えたのは、会社の部下の息子である怜という玩具だった。見目麗しく、頭脳も明晰な少年は、たった六歳で同い年のなんのとりえもない少女の奴隷となる。
「うあ……」
そっとズボンの上から膨らみを撫でると、怜は苦しげに呻いた。
その様子に満足げな笑みを浮かべて、結奈はゆっくりとズボンのチャックを下ろしていった。

結菜と怜０２（お嬢様×下僕（？）＊超短め＊Ｒ１５）（前書き）

短いです！１２００字。そしてＲ１５（温め）。苦手な人はご注意下さい。

結菜と怜０２（お嬢様×下僕（？）＊超短め＊Ｒ１５）

腕の中に飛び込んできた、柔らかい身体。
「怜」
自分を呼ぶ、甘い声。首筋に顔を埋められ、舌を這わせられる。赤く熱い、舌。細い、力を入れればすぐに折れてしまいそうな手が縦横無尽に身体を撫で。
「怜」
「……はい」
そらしていた視線を彼女に戻せば、嬉しそうに笑んで口の端にキスを落とされた。
「服脱がしていい？」
頷く事も拒むことも出来ず、怜はただされるがままにそれを受け入れた。
叶うことなら抱きしめて、押し倒し、自分のことしか考えられないよう、犯してしまいたい。いつも口の端ギリギリにしか降ってこないその唇を、奪って、全部、全部、自分のものに。
「うあ……」
ズボンの上から膨らみを撫でられ、たまらずに呻くと、結菜は美しい笑みを浮かべた。
怜から手を出すことは許されない。してはいけない。
柔らかい黒髪を撫でることもできずに、怜はそっとまた目を逸らした。

結菜に出会ったのはお互いがまだ六歳のときだった。
父に連れられて行った、父の上司の家で、桃色のワンピースに身を包んだ結菜と会った。真っ黒な髪を二つ縛りにして、母親の影からじっと怜を見る。
「結菜、怜君よ」

「れい？」
母親に背を押されるようにして前に出た結菜は、緊張しつつも、興味深げに怜を見つめた。怜は他の子供に比べて色素が薄く、茶色い髪と薄茶の瞳をしていた。それが珍しかったのだろう。いつもからかわれるそれに、ちょっと後ずさったとき。
「きれいね、れい」
笑った顔はとても可愛くて、怜の警戒心は一瞬の内に消え去った。
「いっしょに、あそんでくれる？」
返事を待たずして取られた手を握り返し、怜も微笑む。
「よろしくね、ゆなさん」
父が呼ぶのを真似して名前にさん付けで結菜を呼んだ。
その呼び方は十年たった今でも変わらずに、怜と結菜、二人の関係だけがおかしく、歪なものに変わっていった。

「今日は、司（つかさ）さん、に、会いに行ったんじゃなかったんですか？」
途切れる声で紡ぐと、結菜はちょっと顔を上げて
「会ったわ」
あっさり肯定する。
「でも、仕事が入ったとかで、すぐに帰っちゃったの」
「そう、ですか」
だから、自分がこうして代わりをさせられているのか。
心の内にどす黒い感情が湧くのを感じ、怜はそれを振り払うようにして首を振った。
大企業の社長令嬢である結菜には、四つ上の、大学生の許婚がいる。大学に通う傍ら、親の仕事も手伝うというその人は、とても優秀な青年で、容姿も、家柄も、頭脳も、何一つ欠けることのない、結菜にぴったりな人物だ。
所詮、怜は結菜の玩具でしかない。手に入れたくても、怜からは絶対に手に入れることのできぬ、高嶺の花。ただ、好きなように扱

われて、用が済んだら捨てられる。結菜にとって自分は、それだけの存在だ。
「怜」
伸ばされた手が、怜の手を掴む。
いつか来るその日に怯えながらも、それでも怜は結菜のことを拒みきれない。
己の手を握る彼女のそれを握り返しながら、
「結菜さん」
目の前の愛しい人のことを、ただ思った。

愛し、恋し（貴族×貴族＊一方通行、暗め、死にネタ、R15）

「ユナ」
頬を包む男性らしくない、綺麗な手を、ユナは顔を顰めながらも受け入れた。
ユナの寝室。窓の外はすでに暗く、入浴を終えたユナの部屋にやってきたのは、数日前、自分の夫となった人物だ。
といっても、そこに愛なんてない。
この人はただ自分の、ユナの家がもつ爵位が欲しかっただけだ。
幼い頃から一緒に遊んだその人を、ユナはもうそういった風にしか見れなくなっていた。
傾きかけた父の事業の借金を肩代りしてくれたのは確かに助かった。でも、彼はその代わりにユナとの結婚を要求してきたのだ。そして、ユナは断ることも出来ずにそれを受け入れた。

「どうしてあんな地味な女を妻に？」
彼の恋人であった人が言う。否、恋人であった、なんて嘘。今もきっとユナに隠れて会っているのだろう。彼は夜会であったその人を、別れたはずのその人を、親しげに抱き寄せ、そっと耳打ちするように会話を交わしていた。
「地味に見える彼女にだって、それなりの利用価値はあるのだよ」
――利用価値。
まるで物のように言われ、ユナは深く衝撃を受けた。
化粧室に行くと言って戻ってみたら、夫が見知らぬ女性と親しげにしていた。それだけでショックだったのに、耳に届いた会話は更に彼女を打ちのめした。
「酷いわぁ、そんな風に言ったら可哀想よ」
哀れみよりも、蔑むような響きを含んだそれ。
「利用価値って、もしかして爵位？」

夫は肯定も否定もせずにただ微笑んだ。
「本当に、酷い人」
クスクス、という笑い声が、いつまでも耳に残り、ユナを苦しめた。

※※※※

「あなたはいつまでたっても慣れないね」
顔を逸らし、シーツを握り締め震えるユナに、夫は苦笑して言った。
なれるものか、こんな行為。ただ、子供を作るだけの、愛情も何もない、こんな……。
「ユナ」
応えないユナの顔に手を添え、夫は彼女の顔を自分の方に向けた。
声を漏らさぬよう噛み締められた口には赤い血が滲んでいる。
そっとそれを指でなぞり、夫はユナに顔を寄せた。
「やめて」
強い拒絶の声が部屋に響く。
口づけを拒むユナに笑って、
「大丈夫、約束は破らないよ」
唇から少しずらした位置に口づけを落とした。

何度閨を共にしても、ユナは夫に口と口との接触を許さなかった。
結婚する前、一度強引に奪われて以来、頑なに拒み続けるそれ。
――キスは愛し合う者がする行為だわ。
子供じみた理由で口づけを拒絶する妻に、夫は何も言わずそれに従っている。

彼にとって、子供さえできれば後はどうだっていいのだ。
ユナと結婚する際の、ユナの両親との約束。伯爵家の血を引く、

ユナの血を引く子を、家の後継者にすること。ユナをないがしろにせぬようにと、父が考え出したのだろうその約束は、けれど結局、ユナを苦しめることにしかならなかった。

身体が弱いユナを、夫は毎晩のように抱く。

幼い頃は彼を心配させぬようにと身体が弱いことを黙っていたユナだったが、結婚した今も、そのことを打ち明ける気にはならなかった。

――彼が好き。

遠い記憶に思いを馳せると、そこには父親に連れられて屋敷にやってきた幼い男の子の姿があった。明るい茶色い髪に、薄茶色の瞳。それまで会った誰より綺麗で、可愛らしい、ユナの初恋の相手。

どんなに彼を手に入れたいと願ったか。どんなに彼を自分のものにしたいと願ったか。

神様はユナのその願いをかなえてくれたけど、しかしユナが彼を手に入れた時、彼はもう昔の彼じゃなくなっていた。

ユナ以外の女性を思い、ユナ以外の女性を抱く。

夫になった彼の心は、すでにもう見知らぬ誰かのものなのかもしれない。

「レイ……」

呟いた声はおそらく夫には届かない。

ほとんど音もなく漏れたそれは、呆気なく空気に溶け、溜まっていた涙が一滴頬を伝ってシーツを濡らした。

・

・　・　・

その一年と数ヶ月の後、ユナは夫にそっくりな男の子を生んでこの世を去る。

彼女が生前使用していた私物を、死後全て侍女に処分させ、埋葬さえも、夫が仕事でいないうちに彼のわからぬ場所に葬らせた。ユナが生まれたときから仕えてくれていた老年の侍女は、彼女の遺言どおり全てを実行に移した。

出産の予定日とされていた日、仕事を終わらせて帰って来た夫は、既に生まれている息子と、姿の見えぬ妻に困惑し、屋敷中を探し回った。どこを探しても、どの場所に行っても妻はおらず、彼女が屋敷にいた痕跡すら、全て消えてなくなっていた。

――旦那様、奥様は若君を生んですぐ、亡くなられました。

使用人の言葉が、やけに嘘くさく耳に響く。

だって自分は妻の亡骸さえ目にしていないのに、そんな事実、信じられるはずがない。

ユナは自分が亡くなった後、レイが、本当に彼が愛する人を後妻に迎え、愛しい人と一緒になるのだろうと思っていた。だからこの世を去った後も、彼を煩わすことのないように全ての私物を処分させたし、また墓の場所も、彼には教えなかった。死んでまで来ぬ人を待ち続けるなんて絶対に嫌だったし、もしレイが己のところに墓参りに来てくれたとしても、それは上辺だけで、今までのように、

なんの心もこもっていない義務的感情からだろうと思ったのだ。いや、本性は優しい人だから、一時でも妻であった自分を偲んでくれるかもしれない。けれど、そういったことで、また彼の心を煩わせるのも、やはり耐えられなかった。

ユナは夫であった人が最期まで自分を好いてなんかいないと思っていたし、だからこそ彼の本当の思いには気づかずに逝ってしまった。

行為の後、疲れきって眠ってしまったユナに何度も口づけを落とす夫。

――愛し合う者同士がする、愛の儀式。

彼もまた、ユナを愛しているのは自分だけだと思っていたし、自分を拒み続ける彼女に、起きている間はキス一つできずにいた。

セピア色の記憶。幼い頃の二人。あの日、恋に落ちたのはユナだけではなかった。一目でレイを好きになったユナと同様、レイもまた、初めて会ったあの日、ユナに恋をしていた。

成長するにつれて美しく花開いていくユナに、レイは徐々に焦りを感じ始める。夜会に出るようになったユナに、貴族仲間がニヤ、と口の端を上げ、下卑た言葉を紡ぐ。それに追い打ちをかけるように、ユナに遠縁の、彼女と同じ伯爵位の貴族から縁談が持ちかけられていると噂を聞き、レイは居てもたってもいられなくなった。

彼女が誰かのものになるなんて考えられない。

まだ、誰も手をつけていない汚れのない彼女の肌に、彼ではない誰かの手が触れることなど、絶対に許せなかった。

焦った彼は、気がついたときには伯爵家の借金を肩代りし、それを理由にユナとの結婚を迫っていた。

強引なやり方に、抗議に来たユナをその場で押し倒し、己のものにする。

彼女を手に入れられるならそれでよかった。
別の女性といても、嫉妬の一つしない。ベッドに入れば、すぐに顔を背ける。彼女の手がレイの背に回され、自分から彼を受け入れてくれることなど、結局一度もなかった。
彼女は自分のことが嫌いなんだろう。
いつも悲しそうな表情を浮かべるユナに、心が痛まぬことはなかったけれど、彼女の横に自分以外の男が並ぶことなんて、考えただけで気が狂ってしまいそうだった。

そうして、捉え、囲い込み、閉じ込めた結果が、これ。

愛した人はもう、この世の何処にもいない。唯一彼女が遺してくれた息子でさえ、彼女の面影一つなく、姿かたち、髪の色、瞳の色に至るまで嫌になるほど自分にそっくりだ。彼女はそんなにも、自分の腕から逃れたかったのだろうか。
妻のいない部屋で一人、レイは悲嘆に暮れた。

誰よりも、なによりもあなたを愛していたと言うのに。
伝えたかった思いは、もう二度と愛しい人に届かない。

深夜四時のプロポーズ（一般人♀×芸能人♂）

物足りない、とは思わなかった。会えない日が続き電話やメールさえもなくて正に音信不通。まともに言葉を交わしたのは確か一ヶ月も前のこと。会ったのは三ヶ月前くらいだったかな？　初めの頃は寂しい、悲しい、と嘆いてばかりいたけれど、いつのまにかそんな感情もなくなった。ていうか、ＴＶや新聞を見れば顔を見れるし（一方的だけど）、声だって聞ける。最近は週刊誌などにもよく載っていらっしゃって、腹の立つことにそれは主に女関係のことなのだけど、でも、もうそんなことどうでもよくなっちゃった。

「で、何しに来たの？」

「つまみとビール、持ってきた。飲もうぜー」

深夜二時。突然家の呼び鈴が鳴って眠い目をこすり、怒りを押さえ込み玄関の扉を開ければ、酔っているのか、それともわざとなのか、笑顔を浮かべた彼がコンビニの袋を持ちそこに立っていた。結構です、と扉を閉める間もなく、良太は勝手に部屋へと上がりこみ、ビニール袋に入ったお酒やおつまみやらを次々とテーブルの上に広げていった。そして、あたしの手に無理やり缶ビールを握らせ、

「カンパーイ」

と言いながら一方的に缶をぶつけてくる。普段から割とテンションの高い方だけど、今日は異様なほどハイテンションだ。なにかあったんだろうか。様子を窺えばにこにこと笑顔を浮かべ美味しそうにビールを飲んでいる。こんな風に笑っているということは、よほど良いことがあったに違いない。

どうしたの、と一言聞けばきっと嬉しそうに語ってくれるんだろうけど、なんだか面倒で。なかなか聞く気にはなれなくて、待っていれば良太が話し出すだろうと思い、考えることを放棄した。最近思考を停止させてばかりだ。

「麻奈」

他愛もない話しを繰り返し、段々と話題もなくなって酔いも回ってきた頃、不意に良太があたしの名前を呼んだ。先程までの明るい声とは違う、トーンの低い、囁くような声に一抹の不安を覚える。なに、と返事をすれば良太はにへ、と笑って、

「俺のこと好き？」

首をかしげた。なにを今更、と思った。

そりゃ三ヶ月ほど会ってなかったけど。一ヶ月も声を聞いてなかったけど。その上あなたはどこの誰とも分からないようなアイドルと勝手に週刊誌に取り上げられたりしてるけれど。

それでも、どうしてか私は、あなたを好きでいるのをやめられない。

こうして会いに来てくれれば嬉しくて、突然でも、例え深夜に押しかけられたとしても、まぁいいや、で思考を停止させてしまう。怒りよりも悲しみよりも、どんな鬱屈した感情よりも、愛おしさだけが先に立つ、あなたへの気持ち。

「愛してるよ」

と柄にもなく呟けば（酔っていたからこそできた発言だと思う）、良太は信じられないというような表情を浮かべ、持っていた缶ビールを床に落とした。まずい、もしかして別れ話でもするつもりだったのだろうか（だとしたらあたしはとんでもなく空気の読めない女だ）。

「あの、良太……？」

何も言わない良太に、不安になって呼びかけるが、聞こえているのかいないのか。何の反応も返ってこない。気まずさから逃れるため、空き缶を片付けようと手を伸ばしたあたしは、突然重ねられた手に引き寄せられる。

「結婚してくれ」

間近で聞こえてきた低い声。瞬間頭が真っ白になって気がつけばあたしは「はい」と頷いていた。

深夜四時。もうすぐ夜明けというこの時間に、空き缶や食べ終え

て空になったつまみの袋が転がる部屋でプロポーズ。なんて夢もロマンもないシチュエーションなのか。
普通だったら突っ込みを入れている場面なのだろうけど、抱き寄せられたぬくもりが愛おしすぎて、囁くように耳に落とされた愛の言葉が嬉しすぎて。
ああ、もう、どうだってよくなってしまったのだ。

（思考を止める、あなたの言動）

平和的世界の守り方（魔王×女子高生）

「あ、ダウト」
出されたばかりのカードに手を伸ばし、香菜子はそれをひらりと裏返した。
記載された数字はハートの十。直前に香菜子が出したカードは五の番号で、ここで相手が出さなければならなかったのは六のカードだ。つまり。
「はいダウト！　ダウトです、陛下！　どーんまーい」
嬉々満面の表情で積み重なったカードの山を差し出す香菜子に、テーブルの向かいに座った男は悔しそうに眉を寄せた。
「お前、先程からズルをしておらぬか」
負け惜しみのように言う。
「していませんよう、そんなこと。するわけないじゃないですか」
「しかし、それではどうして吾ばかりがカードを貰わねばならんのだ」
「そりゃ、陛下が弱いから」
歯に衣着せぬ物言いに、男は「くっ……！」とカードを握り締めた。

どこかの世界のどこかの魔界で、王として君臨するこの男。通称、魔王。人々に恐れられ、畏怖される対象の彼と、今年十六になる高校一年生の仁科香菜子（にしなかなこ）はほのぼのとカードゲームをして遊んでいた（相手にとっては本気も本気、世界をかけた勝負のつもりらしいが、対戦方法がカードゲームとあっては危機感も薄れるというものだ）。
種目はダウト。一から順にカードを裏返しで出していき、嘘を見破ったり見破られたりして先に上がったら勝ちという単純なゲームである。
トランプを始めてから三十分。なかなかに魔王は分かりやすく、

顔に出やすい性質なのか、着実にカードを減らしていく香菜子とは反対に、魔王の手持ちは増える一方だった。
「あ、あたし上がりでーす」
高らかに宣言して最後の一枚を出した香菜子に、魔王はガバリと顔を上げた。
「嘘だろう！？」
「本当でーす」
空いた掌をひらひら振ってみせると、「ダ、ダウト！　ダウトだ！」魔王は慌てて彼女が出したカードを裏返した。
目に映る模様はクローバーの二。魔王から始まって、直前に彼が出したカードがスペードの一であるから、正真正銘香菜子の勝ちだ。
「また負けた……」
打ちひしがれて、カードを集め始める魔王（片付けは負けた人の役目と決めている）。
丁寧にテーブルの上のカードをかき集めていく魔王を見ながら、香菜子は制服のポケットから携帯電話を取り出した。淡いピンク色をしたお気に入りのそれは、高校の入学祝に両親に買ってもらったもの。電波こそ入らないが、時刻を知る為の時計代わりとして利用している。サブディスプレイに視線を落とせば、夜の七時半を少し過ぎたところだった。
「よし、もう一戦――」
「すみません陛下、あたしそろそろ帰ります」
トランプを集め終え、リベンジを申し込もうとした魔王に、香菜子は被せるようにして言葉を紡いだ。
いつもは九時、十時頃まで異世界（ここ）にいて魔王の相手をしてやるのだが、しかし今日は早々に帰宅せねばならない理由があった。
「来週から中間テストが始まるので、しばらくはテスト勉強に励もうかと思います」
学生の本分は勉強だ。異世界で魔王と対決する（といってもカードゲームだが）使命を負った香菜子も、家に帰ればただの女子高生。

世界の危機も重要だけど、赤点を取って追試になることも全力で回避すべき重要な問題だ。
「てすとか……」
負けたまま終わるのが不満なのか、魔王はぽつり呟いた。
「では、しばらくお前とも会えなくなるのだな」
目に見えて落ち込んだ様子の魔王に、香菜子は思わず深読みしそうになる思考を必死で振り払った。
濃紺色の髪に金色の瞳。纏う衣装は真っ黒で、身につける装飾品もちょっと邪悪そうなピアスや指輪など。異世界（このせかい）で“魔”の象徴として畏怖され、忌み嫌われる相手に、香菜子は時々あってはならない感情を抱くときがある。
見た目どこからどうみても“魔王様”なのに、同じテーブルに座り向かい合ってトランプをしていると、なんだか普通の男友達と遊んでいるような気分になってくる。異世界独特の見た目も、コスプレ好きで片付けてしまえば見えないことはないし、なにより負けず嫌いで子供っぽいその性格が、どうしても憎めずに親近感を抱かせるのだ。
「来週の金曜日、テストが終わればまたここに来ますから」
「何時頃に来る」
元の世界に通じる扉の前に立ちながら、見上げる人はどことなく寂しげだ。
「そうですね、午前中にテストが終わるので、多分お昼過ぎくらいには」
「そうか」
頷いて、魔王はふと片手を上げた。
なんだ？　首をかしげる香菜子の傍らに手を伸ばし、その黒い髪を一房掬い上げた。
「早く来るのだぞ」
顎までのショートカットのそれをゆっくりと梳き。はらり。黒髪は呆気なく魔王の手から零れ落ちて元のように戻った。

「しっかりと勉学に励め」
仕上げとばかりにぽんと頭を撫でられて、「陛下も、次会うときはもう少しトランプ強くなっていて下さいね」注がれる視線から逃れるようにして扉をくぐった。

瞬きを一つする間に景色は変わり、荘厳な魔王の城から、自宅の物置へと帰ってきた香菜子は、そのままズルリとガラクタに埋もれ、その場にうずくまった。

※※※※

初めて異世界に行ったのは五歳のときだ。
大好きな祖父に連れられて、異世界に通じる扉をくぐった。

若いときに“勇者”として召喚された経験を持つ祖父は、異世界の伝説の通り魔王を倒し、世界を救い英雄となった。寝物語のように繰り返し聞かされてきた祖父の武勇伝。人々を脅かす悪役を打ち払い、物語はめでたし、めでたしで終わるのだが、しかしこの物語には続きがあった。
祖父に倒された魔王は、一旦は負けを認め今後人間に手出ししないと誓う。世界には平和が戻り、勇者としての役目も終わった、さあ帰ろうかと祖父が踵を返したその時――
「待て！」
魔王がそれを引き止めた。
曰く、自分は勇者に負けた。それは認める。人をいじめるのももうやめるし、大人しく城に籠もって暮らしていこうとも思う。でも――
「リベンジマッチを希望する！」
魔王はなんとも負けず嫌いな性格だった。
戦いで負けた、それは分かっている。でも、もう一度戦ったら今

度は負けない！　自分が勝つ！　そして改めてその時、世界を征服し頂点に君臨してやる！

言い張る魔王に、祖父はとりあえず疲れているから、リベンジマッチはまた今度日を改めてからと言いひとまず家に帰った。

そして数ヶ月後、祖父は元の世界のカードゲームを持って城に現れた。魔王との決戦で無理をした折り、ぎっくり腰になってしまった祖父は、もう素早く動くことは出来ないので、肉体戦ではなく頭脳戦で決着をつけようと持ちかけた。

それから数十年。全く見た目の変わらない魔王とは異なり、人である祖父は緩やかに年老いていった。溌剌な青年はいつのまにか皺くちゃの老人へ。体力は衰え、病気にも罹った。ゆっくりと、けれど確実に寿命を燃やしていく祖父に代わり、今度は孫の香菜子が勝負を引き継ぐことになる。

魔王が勝つまでは終わらないこの勝負（なにせ彼は負けず嫌い）。

香菜子が役目を継いで二年後に祖父は他界したが、勝負はその後も変わらずに続いていった。

「あれから、十一年か」

スカートの裾を払いながら香菜子は呟いた。先程まで沸騰したように熱かった頬は、少し時間を置いたおかげで大分マシになっている。気を抜くとすぐまた赤くなりそうな頬を叩いて、気を引き締め物置から出た。

祖父から役目を受け継いで、魔王との対戦を繰り返すこと何千回。

初めは世界を救うという使命感に燃えていた香菜子であったが、交流を重ねるうちにトゲトゲした気持ちは徐々に丸く優しく、穏やかなものへと変わっていった。

しかも。

どうしてだろう。最近魔王の自分を見る目が変わってきたような気がするのは気のせいか。さっきだってあんなふうに髪に触って――

「あああああ……！」
自ら墓穴を掘った香菜子は、再び熱くなった頬を押さえ、そそくさと自室へ引っ込んだ。
彼の態度が特別に思えるのは自分が彼を特別に見ているせいなのか。
世界を救う戦い（カードゲーム）よりも、最近ではライバルである魔王の一挙一動が気になる香菜子だった。

冬の日のこと（駄目人間×しっかり者＊従兄妹）

寒い。

そう言って一人、真冬の部屋で暖房もつけずに薄着で転がっていた従兄を発見したのは今朝方のことだった。

「馬鹿じゃないの？」

糸子（いとこ）が心底呆れた声で言うと、泉太郎（せんたろう）は「だって」とか「でも」とか口を動かした後、結局「ごめんなさい」と力なく頭を垂れた。

海外赴任中の叔父夫妻に頼まれて週に一度の家政婦バイトを初めて早一月。糸子は四つ上の従兄がこんなにも生活力のない男だとは知りもしなかった。

電化製品の使いすぎでブレーカーを落とし、直し方が分からないと数日間暗闇の中で過ごしたり、飯の炊き方が分からないからと糸子が飯を作りに来る日以外は何も食べず、餓死しかけたり。もう、本当、人間としてどうかと思うくらい一人暮らしに向かない男だ。

（飯が炊けなきゃコンビニやファーストフードにでも行けっての！）

しかし彼にとって外食とは、支払いにゼロが幾つもつくような高級レストランでのことを指すらしく、コンビニやファーストフードなど利用したことがないという。それを聞いたとき、どんなに妬ましく羨ましかったことか（あまりにも腹が立ったので蹴りを一つ入れてやった）。

中小企業勤めの父とパートタイマーな母のもとに生まれ、超が上につくほど一般庶民な糸子と違い、ほんの少しでも血が繋がっていることを疑いたくなるほど、泉太郎の家はお金持ちの家庭だった。父親は世界的な建築デザイナーで、母親は有名絵本作家。才能の塊のような両親から生まれた泉太郎は、これまた天才と小さい頃からもてはやされ、今や生活力ゼロのくせして売れっ子小説家として名を馳せている。

神様、世の中こんな不公平であっていいのか。嘆きたくなるが、神様はなにも答えちゃくれない。世の中に才能の種をばらまいて、芽が出るも枯れるも後は自分次第ってことなんだろう。枯れる寸前にせめて肥料とか水とかを与えてくれたっていいのに、苦境の中でこそ咲く花は美しいなんて言っちゃってさ。かと言って恵まれた環境で育った泉太郎の書く小説が美しくないかって言ったらそんなわけもなくて。

「あの、イト？」

コンロにかけた鍋を見ながら、具と一緒に己の思考もぐつぐつ煮詰めていた糸子に、泉太郎はおずおずと声をかけた。

「なに、お風呂上がった？」

振り向いて言うと、ほやほやと身体から湯気を立て突っ立っている人は「うん」と頷く。

頷いた拍子にびっしょりと濡れた髪から水滴がポツポツと垂れて、

「ああ、もう髪の毛半乾きじゃないの」

糸子は泉太郎の首にかけられていたタオルを引ったくり乱暴に頭を拭ってやった。

「いた、いたいよイト」

「あんたは、ドライヤーの使い方も知らんのか」

水分を吸ってしな、と下に垂れていた髪は、タオルに水を奪われた瞬間縦横無尽に跳ね始める。ああ、元気な癖っ毛ですこと。

がしがしと、髪全体を拭い終えた後、

「はい、あとはドライヤーかけといで」

タオルをもとの場所にかけてやると、それまで隠れていたアーモンド型の瞳がじとりと不満げな視線を送ってきた。

「なに、その不服そうな顔」

「イトは面倒見いいくせにガサツだ」

喧嘩売ってる？

カッと表情を険しくした糸子に、泉太郎は慌てて洗面所の方に逃げ込む。

四つも年上で、既に成人して二年たつというのにこの人は。どうにも子供っぽい従兄に呆れながら、糸子は煮詰まってきた鍋の仕上げに専念することにした。

「はいこれ」

食後、きれいにしめのおじやまで食べ尽くされて空になった鍋を挟みながらデザートのプリンをつついていた糸子の前に、印刷したての白い紙の束が差し出された。

「待ってました」

糸子は嬉しそうにそれを受け取ると、散らかっていたテーブルの上の物を端に寄せて、そこに紙の束を置く。

一番上に重ねられた紙には、真ん中に『春』とだけ印字されている。小説家、唯濱（ゆいはま）泉太郎の最新作。それもまだ出版すらされていない出来立てほやほやの小説で、実はこれが糸子の家政婦としてのバイト代だったりする。

「春……」

なぞるようにしてタイトルを読み上げ、それから一度向かい側に座る泉太郎へと視線を移す。

「読んでいい？」

「どうぞ」

許可をとる糸子に、泉太郎が頷く。

糸子は逸る気持ちを抑えながらゆっくりと、クリップで右端がとめてあるだけの“小説”を捲った。

一枚目は白紙。

一呼吸置いて、それから物語への扉を開いた。

泉太郎の書く物語は流れるように紡がれる文章と、ほのぼのした中にもゆらりと心を揺らす感動が含まれている。幸せなのに、泣きたくなる。切ないのに、心があったかくなる。じんわりと目に熱がたまって、やがて涙が滲み、ゆっくりと頬を伝っていくように。

言葉自体は難しくなく、子供も読めるように身近な言葉たちが並べられているのだけど、糸子が逆立ちしても出来ないような表現を、泉太郎はする。聞き慣れた言葉を寄せ集めて、親しみのある言葉から、彼は芸術を作り出すのだ。

国語が苦手な糸子にだって分かる、泉太郎の小説の魅力。

「……ど、どうだった？」

最後のページを読み終え、パタリと紙を閉じ、表紙に戻した糸子を見て、泉太郎が恐る恐る訊く。

糸子は目の端に滲む涙を押さえて拭いながら、少し余韻を楽しむように、テーブルの上の小説に視線を向けていた。

それから、しばし間を置いて顔を上げる。

「まあまあ」

途端、憮然とした表情で言う糸子に泉太郎はがくりと肩を落とした。

「イトは厳しい……」

悲しげに呟いて、テーブルにのの字を書きはじめる。

「小説はいつも通りよかった」

糸子はそう言って、「でもね」と付け加える。

「今回これ書き上げるために何日かかった？　今日あたしが来たとき、寒さに呻いてたのは寝食忘れてこれ書いてたせいじゃないでしょうね……」

怒りを含んで言う人に、視線をあわすこともできずに泉太郎は来たとき同様「だって」とか「だけど」とか呟いた。

「だって、でも、だけど、でもない！　あたしがどうしてここに来てるか、あんた知ってるでしょうに」

「お、おれの面倒を見に……」

びくつきながら答えが返ってくる。

「そうよ、正解」

分かっているならどうして本末転倒になるようなことをするのか。

新作小説をバイト代の一つとして要求したのは、“無理なく普通に”仕事として泉太郎が書いている小説を一番に見たいと思ったからだ。だというのに、泉太郎は糸子のために仕事とは別に小説を書くようになり、結果仕事と糸子の報酬とに追われててんてこ舞。
「し、仕事の小説はまだ締め切りが一月先だから」
「だからってわざわざ週に一度世話焼きにくる小娘のためだけに短編書き下ろさんでもいいわ！」
泉太郎は小説を書くとき、生活そっちのけで集中するため、その間の生活が普段以上にダメになる。それを心配しての叔父夫妻の糸子派遣だったのだけど、その糸子が愛息子の不摂生に拍車をかけてると知れたらどんな顔をするか。
「あのねぇ、泉ちゃん。もう少し生活力を身につけようよ。あたしはここに来る度泉太郎のミイラを見つけるんじゃないかってヒヤヒヤしてるんだからね」
ため息をついて言うと、
「ミイラは一週間かそこらじゃできないと思うよ」
泉太郎は正論を投げかける。
「やかましいわ。それだけ心配してるのよ、分かってる？」
「うん、でも俺、イトが来てくれるのが嬉しいんだ」
泉太郎はへにゃりと幸せそうな笑みを浮かべた。
誰かが自分を心配してくれる。
一人ぼっちの家に、週に一度誰かが訪ねてきてくれる安堵感。
「俺、今まで父さんや母さんとずっと離れたことなかったから。こんな年になって恥ずかしいんだけど、一人暮らしを始めて、まだ一月しか経たないのにすげー不安で、すげー寂しい」
ブレーカーが落ちても、真っ暗闇の中で朝を待つしか術を知らない。
誰かが作ってくれたご飯を、ただ食べることしか術を知らない。
一人になって初めて気づく自分の不甲斐なさ、情けなさ。
「イトが家に来てくれるなら、俺はもっと沢山小説を書くよ」

「あんたは自分がしっかりしようとは思わんのか」
殺し文句、とばかりに言ってのける泉太郎に、糸子はすかさず突っ込みを入れる。
たかが飯代、世話代、掃除代でベストセラー作家の最新作を読めることは嬉しいが。しかし、この人はもう少ししゃんと一人立ちするべきだと思うのだ。あんなに素晴らしい物語を書くのに、どうして実物の泉太郎はこんなだめ人間なの。
「泉ちゃん、このまま他人にもたれかかって生きていく気？」
経済力はあるから、金銭的な面は問題ないけど。
これを解決するためにはあれか、お嫁さんでも貰うべきか。
「イトがいるからいいよ」
へにゃへにゃと笑う泉太郎を「あたしを一生家政婦にする気か」一蹴してやると、泉太郎は「そういう意味じゃないのになぁ」と困ったように頭をかいていた。
じゃあ、一体どういう意味なのよ、とは、満腹になって睡魔に襲われたらしい彼に、訊くことはできなかった。

紳士兎と乙女の恋（中年兎×女子大生＊ペット擬人化）（前書き）

※ペット擬人化です！普通の人間に獣耳プラス尻尾が付いているのが標準装備として話が展開していきます。苦手な人はお逃げ下さい。

紳士兎と乙女の恋（中年兎×女子大生＊ペット擬人化）

我が家には紳士的な中年兎が一羽いる。
年のころは四、五十代。
チャームポイントは黒縁インテリメガネと、その長くて真っ白な耳、ふさふさの尻尾。
飼いはじめの頃はただのオジサンがバニー耳&尻尾つけてなにやってんの、とか思ったけどもう慣れた。
意外と可愛いし、料理や洗濯なんかも得意なので結構重宝している。
ただ最近の困りごとは、この兎、紳士のくせに、いや紳士だからこそなのか？　とにかく、妙な色気がある。
「スノーさん、色っぽいっすね。へへへ」
スノーは兎の名前だ。
誘惑にころっと負けて抱きつこうとすると、ひどく紳士的な笑みを浮かべてこう言われる。
「六花（りっか）さん、はしたないですよ」
ちょっと眉が寄っているのがポイントだ。笑いながらも、幼い子を「めっ」とたしなめるような感じで。
それがまた、色っぽく。
「女性がそんな下品な笑い方してはいけません」
下がった眉毛と、メガネの奥の優しい灰色の瞳。
年を経て穏やかに皺の寄った眦は少しばかり垂れ下がって、なんだかとても魅力的に思えるのです。

※※※※

「私、このままだとスノーさんを押し倒す日が近いうち来そうで怖い」

私の言葉に、向かいに座っていた友人はブッと勢いよくシェイクを噴出した。
「友花（ゆうか）、汚い」
眉を顰めてティッシュを投げつけると、「ありがと」と言って飛び散ったそれを拭き始める。
ほらほら、隣に座ってる子が信じられない、という顔で見てくるじゃないか。
久々に学食にしようというから来たけど、やっぱり人が多すぎて苦手だ。
「その大勢人がいる前でよく押し……なんてこといえるよね」
呆れる友花に、私は「平気じゃない？」と周りを見やった。
大学の学食では、みんな食べることやお喋りに夢中で他の人のことなんか気にしてない。
そりゃ、友花がシェイク噴出したのはばっちり見られたけど。
「あんたのせいでしょうが」
「他人の会話なんて気にとめる人なんていないよ」
「たとえ聞かれてなくても、そういうこと人前でいうのはどうかと思うけどね」
「だから学食やめようって言ったのに」
「だって私お弁当ないもの、あんたみたいに」
「友花の家の兎さんは作ってくれないの？」
スノーさんお手製のヘルシー弁当を摘みながら友花を見やると、友花はケッと“はしたなく”舌打ちをした。
「ミミが作ってくれるわけないでしょ。あいつが興味あるのは雄兎のことと、セクシーな下着のことばかりよ」
「普通雄の方が性欲強いのにね」
友花の家の雌の兎さんは、飼い主曰く年中発情期らしい。
いつもどこかの雄を誘惑してはフラフラと茂みに連れ込み、飼い主の友花を困らせているとか。
我が家の紳士さんとは正反対で、私は絶対に友花の兎さんとスノ

ーを会わせるのはやめようといつも心に固く誓っている。
「あいつのこと話すと十八禁になるからやめよう」
昼間の学食で話すことじゃあない、と友花は箸を振った。
「六花のとこの兎はいいよねぇ、家事上手な紳士で」
「そうなのよ、それに色っぽいのよ」
「またそこに戻ってくるか。折角十八禁を回避したのに」
「だって本当に色っぽくて、二人っきりでいるとどうにも誘惑に負けそうになるの！」
「六花さあ、今まで彼氏いたことあったっけ？」
「なに、急に？」
ないけど、と首を振れば、友花は「だからだよ」と箸で私を指差した。ちょっ、お行儀わるいよ！
「男慣れしてないのが急に雄の兎なんか買っちゃったから、たかがペットの一挙一動に振り回されることになんのよ」
「そうかなぁ」
「そう！　絶対にそう。で、ここからが本題なんだけど、今日飲み会行かない？」
「はい？」
きょとんとする私に、「いやぁ、一人女子が足りなくてさ」なんていう。
「それはつまり合コンとやらでしょうか」
「イエス！」
「ええー」
私、そういうの苦手なんだけどな。人見知りするし、それに合コンっていう雰囲気が嫌だ。
けれど友花は「ほとんど私の知り合いだし、嫌なら途中で帰ってもいいから」と付け足した。
強引な友花に押され、私は結局飲み会という名の合コンに連れて行かれてしまうのである。

そして、午後十一時。
私はやっぱり行かなきゃ良かった、と後悔の念たっぷりで自宅マンションへと帰りついた。
男の子なんか苦手だ。話合わないし、タバコくさいし、すぐに下品な話をしようとするし。
男子全般がそうとは思わないけれど、特に今日のメンツは最低だった。
メンバーで一番可愛い女の子に夢中になるのはわかるけど、他の子（つまり私とか）はほったらかしで。
二時間という時間がこんなにも長く感じたのは初めてかもしれない。
無駄な孤独感にさいなまれ、友花に言われていた通り、私は早々に席を辞してきたのだった。
「ただいまー」
へろへろになって家の玄関を開けると、待っていてくれたのかスノーさんがすぐにこちらへと歩み寄ってきた。
「ただいま、スノーさん」
ぎゅむ、と抱きつくと、スノーさんはいつもみたいに困った顔をする。
「お帰り六花さん」
「ああ、会いたかった。私の兎さん！」
「酔っていますね？　それに、タバコの匂いも」
「ごめん、臭かった？」
慌ててひっついていた腕を放す。
「今日合コンでね、来てた子たちがみんなスパスパタバコ吸ってたの」
「合コン？」
耳慣れない言葉なのか、スノーさんはちょっと耳を揺らして首を傾げた。
長くて白い耳も、彼についていると何故か紳士的な一つのアイテ

ムになる。
友花の家の兎さんみたくピンと立ったタイプの耳じゃなく垂れ耳だというのが一つ重要なポイントなのかもしれない。
私はスノーさんを視界の端に捉えながら靴を脱ぎ部屋に上がった。
「合同コンパの略だよ。簡単に言えば、男女が出会い目的で開催する飲み会かな」
「出会い……」
まだちょっと分からない様子でスノーさんは耳を揺らす。
でもこれ以上の説明は思いつかなくて、私はお風呂入ってくるね、と言って浴室に向かった。

お風呂を出た後、スノーさんはどこか悩ましげにソファに座って俯いていた。
いつになく真剣そうなその表情が、これまた色っぽくて、やっぱり私はこういう男の人に弱いんだなぁ、と再確認する。
若く溌溂とした男の子よりも、落ち着きがあって柔らかく包み込んでくれるような、そんな大人な男性が好きだ。スノーさんが私の恋人だったらいいのに、なんてありえない妄想を振り払って、私はその背に声をかけた。
「スノーさん、なにか悩み事？」
スノーさんはハッと驚いたような表情で振り返る。
どうやら私が来たことに気づいていなかったようだ。
「ああ、すみません。ボーッとしていました」
恥ずかしげに笑うスノーさんはこれまた魅力的で、私は気づかないうちに口を開いていた。
「スノーさんってどうしてそんなに素敵なんですか」
「え？」
「紳士的だし、家事も出来るし、優しいし、色っぽいし、大人だし」
およそ欠点なんか見つからないんじゃないかと思う。
理想の、男性像。

けれどスノーさんは謙虚だから「そんなことありませんよ」と自嘲気味に言ってくるのだ。
「またまた、謙遜しちゃって」
「そういうわけでは……」
メガネの奥の瞳が困ったように揺れるので、私は本当のことなのだけど、賞賛しすぎたかな、と反省する。彼は謙虚で恥ずかしがり屋さんだ。褒めすぎると照れて困ってしまうので、賞賛はこのくらいにして後は心の中に収めることにしよう。
「でも、最後に一つだけ。私スノーさんのこと飼って良かったよ」
へへ、と笑うとスノーさんはやはり困ったように「ああ、もう」と呟いた。
次の瞬間、私はぎゅっと何かに包まれた。
暖かい腕、でも、それは想像していたよりも遥かに力強く私を抱きしめた。
「私は、紳士なんかじゃありませんよ」
耳元で呟かれた低い声に、右耳から熱が生じて体中が沸騰するかと思った。
「ス、スノーさん……」
戸惑っていると拘束が解けて、
「おやすみなさい、私の可愛らしいマスター」
ちゅ、と軽い音を立てて頬に柔らかなものが触れた。
呆ける私の髪を何度か愛しそうに梳いた後、スノーさんは自分の寝室へと入っていく。
「ああ、もう」
数分後、ようやく我に返った私はその場にずるずると崩れ落ち、まだ熱の残る頬を押さえてうずくまった。
「なにが、紳士じゃない、ですか……」
頬におやすみなさいのキスだけして去っていった紳士兎を思って、不埒な私はまた恋情を募らせるのだ。

金木犀の満ちる部屋（病弱青年×同い年女子＊身分差＊悲恋？）

病院のような、つんと嫌な薬品のにおいが充満してるのではないかと思っていたそこは、予想に反して全然そんなことはなく。ただすぐそばの庭に生えた金木犀の香りで満たされていた。あまい香りが満ちた真っ白な部屋はどこか現実味がなく、この世ではない別の空間であるかのように思えた。

「やあ」

彼が言う。元々色素が薄く色白だった肌は更に青白く、浮ぶ笑顔を儚げに見せた。窓から入ってくる風が、彼の綺麗な茶色い髪を揺らす。ひざの上に開いた状態で置かれた本のページがヒラヒラ、と揺れて数ページ分捲れた。

「こんにちは」

私はそう言って入り口で止まったままだった足を動かして部屋の中に入った。彼を真似して笑顔を浮かべたつもりだったけれど、上手く笑えたかどうかわからない。

傍らにおいてあった椅子を一脚、移動して彼のベッドの横に置いて、それに腰を下ろした。見下ろしていた彼の顔が、ようやく真正面になる。この部屋での、私の定位置。

「今日は何の本？」

「ん？　ああ、推理小説。読む？　裏の金物屋が犯人なんだ」

「……犯人を教えられて、推理小説を読む人はいないと思うわ」

じと、と呆れた顔をしてみせると、彼は「犯人を教えなくても読

む気はないくせに」と言った。わかっているなら勧めないでほしい。私はそんな推理小説なんかよりも、甘い甘い恋愛小説が好きなのだ。相思相愛、主人公が必ず好きな人と結ばれるような、そんな夢のような物語が。

「相変わらずロマンチストなんだね」

そう笑われて、私は馬鹿にされたような気がして「悪かったわね」と、頬を膨らました。

「いや、別に。女の子らしくていいんじゃない？」

くすくすと笑いながら言われても、説得力がない。ますます馬鹿にされた気分だ。それにもう、女の子なんていう年じゃない。けれど、ふん、とすねるように顔を背けてしまうあたり、自分でも子どもっぽいと認めざるを得ないのかもしれない。

やや反省しながら顔をもとに戻そうとした瞬間、棚の上の花瓶に、綺麗な花が生けられていることに気がついた。

「誰？」

誰が、持ってきたの。最後まで言わずとも、彼にはなんのことか分かったようで「ああ、」と呟いた後「祥子さんが」と答えた。

「へえ、きてたんだ？」

「さっきまでね」

「……」

「どうかした？」

「私もなにかもってくればよかった」

失敗した、と呟くと、彼はまたくす、と笑った。

「いつもそんなこと気にしないくせに」

「そうだけど」

なんか、他の人が持ってきてると聞くと、自分もそうしなきゃいけないような気がしてくる。ああ、ここに来る途中にあった花屋でなにか買ってくるんだった。そこの花瓶に生けてあるような、綺麗で上品なバラなんかに負けないくらいの、すごいやつを。といっても、あんな高価そうなバラ以上のなにかを私が買えるわけもないのだけれど。

恨めしそうにバラを睨んでいると、手首に生ぬるい体温が触れた。ん？　と視線を手元に戻すと、案の定彼が私の左手を掴んで自分の手の中に引き寄せていた。

「僕は花なんかよりも、君が来てくれるだけで嬉しいんだけど」

そう言って私の左手の甲にちゅ、と口付ける。

「……会わないうちに随分と女性の扱いが上手くなったのね」

嫌味のつもりで言ってやると、分かっているのかいないのか、彼は嬉しそうに「まあね」と言って微笑んだ。私は溜息をついて、手を振り払い、彼にさらわれた左手を取り返した。

唇が触れた部分が、熱い。

「本当になにもいらないんだ。来てくれるだけで充分」

そうして彼はまた微笑む。

「でも、もう来れなくなるけどね」

私は何故だか不意に彼を傷つけたくなって、言葉を紡いだ。彼の顔が曇ってしまえばいい、そう思って。

けれど、彼は変わらず優しげな顔をして頷いた。

「うん、知ってる」

窓から入った秋風が、また彼の髪を撫でる。それと同時に、金木犀の香りが少し強くなった気がした。

「学校の先生なんだって？　僕達より四つ年上の。誠実そうな人だったっておばさんが母さんに話してた。いつ頃結婚するの？」

すらすらと話していく彼。

私は目の前が真っ暗になった。

なんだ、全部知っていたのか。そりゃそうだ、私の母と彼の母は大の仲良しで、今までだって情報はいつも筒抜けだった。普段の何気ない話から、あまり知られたくないようなことまで、全部私が言う前に彼のもとに届いてしまっていた。だから、私の結婚の話だって、彼が知らないはずはなかった。

でも、どうしてだろう。この縁談がまとまったのは一ヶ月も前のことなのに。彼が母親から話を聞いたのも、きっと昨日今日じゃないはずだ。なのに、なのにどうして、彼は今までなにも知らないふりをしていたのだろう。

どうして、相変わらずそんな優しげな微笑を浮かべているの。

「春くらい、かな」

出来るだけ平静を装って答えた私に、彼は「ふうん」と頷く。

「じゃあ僕の式の方が少し先になるね」

その顔に浮かぶ、綺麗な微笑み。

どうして、そんな風に笑えるの。

傷つけようと思って吐いた言葉は、回りまわって自分に戻ってきた。

私は今、きっとひどい顔をしているだろう。

半年前、彼の婚約が決まった。病弱で、一日中床に臥せっていなければならないような彼に、その話が舞い込んできたのはほとんど奇跡だった。彼の遠縁にあたる親戚の、大金持ちのお嬢様が、なにかの折、この家に親戚同士が集まった際、たまたま窓際で外を眺めている彼の姿を見て、一目ぼれをしてしまったのだとか。

両親は、最初は反対したらしいのだけど、娘の頑なといわんばかりの恋情についには折れ、また彼の家が代々続く旧家であったこともあり、結局二人の婚約を認めた。相手は一生遊んで暮らせるような大金持ち。また彼の家もそれなりに裕福だ。彼が働くことが出来ぬ体であっても生きていける。彼と結婚できるような娘など絶対現れないだろうと思っていた彼の両親は喜んでその縁談に応じ、この冬めでたく式を挙げることとなった。

それを聞いた時の、私の気持ち。

私はその日から何日かふさぎ込んで、部屋から出ようともしなかった。

母の親友の息子であり、小さい頃からよく知っていた彼のことを、私はひそかに好いていたのだ。病弱でいつも白い部屋のベッドの上にいて、優しげな笑みをこぼす彼が、好きで、好きで、どうしよう

もなく好きだった。
けれど、私の家は彼の家のように裕福ではなく、旧家でもない。母親同士が親友であったとはいっても、それは母が彼の母に仕えていた時があり、そこで年が近かった二人が意気投合しただけのことであり、私は彼と決して対等な身分などではないのだ。私達が結ばれることなど、ありはしない。
私はそのことを、よく理解していたつもりだった。理解したうえで、ただこうして傍にいられる日が長く続けばいいと願っていた。でも、そんな考えは全部自分に対する誤魔化しだったのだ。
本当は彼とずっと一緒にいたかった、自分だけを見つめて、愛を囁いて欲しかった。まるで都合のよい恋愛小説のように、奇跡が起きて彼と結ばれることを夢見ていた。私のものにしたかった。ずっとずっと、自分だけに笑いかけて欲しかったのだ。

彼の婚約を知った後、私は見も知らぬ人と見合いをした。
彼が、私がそうだったように、彼も私の結婚を悲しんでくれればいいと思った。悲しんで落ち込んで、心を乱してくれればいいのに。そうしたら、少しは救われたかもしれないのに。

じ、と彼を見つめる。相変わらず浮かんでいるのはいつもの優しげな表情だ。

「そんな顔するなら、最初から言わなければいいのに」
「え？」

不意に、また左手に体温を感じた。思わず顔を上げ、見返したときには、強引な力でベッドに引き上げられていた。
真正面には彼の顔。でも、いつもみたく椅子に座って眺めるような感じではなくて、ベッドの上の彼の膝の上に、横抱きにするようにのせられている。

「僕を傷つけるなんて、君にはできないよ。だって、」

抱きすくめられていた腕を緩め、彼が私を見る。

ゆっくりと、焦点も合わないほど近くに、彼の顔がせまってきて。

「君から与えられるものは、なんだって。たとえ痛みであっても、僕にとっては愛しくてたまらないんだ」

そうして、彼は笑って私にキスをした。

ルシファーとトーコさん（吸血鬼×オタク女子※会話のみ小ネタ）

私は今、吸血鬼を一匹飼っている。
名前はルシファー、性別は♂。年齢は二八五歳（自称）で、外見は金髪赤眼のギリシャ彫刻並みいい男……なんだけど、この吸血鬼とにかく『ウザイ』。数週間前に公園で行き倒れになっていたのを助けて以来なぜだか懐かれてしまって……ああ、早く出て行ってくれないかなぁ。

※ルシファーとトーコさん
「トーコ、トーコ、俺ハラ減った……」
「んー、ちょっと待ってねー」
「待てない。俺もうハラ減りすぎて死にそう」
「大丈夫、大丈夫。空腹くらいじゃ吸血鬼は死なないから」
「死ぬよ！　トーコは俺が餓死してもいいのか？」
「そうねぇ、扶養家族が一人減って家計が助かるわねぇ」
「！？」
ガーン

※ルシファーとトーコさん
「トーコ、トーコ、俺なんか変」
「んー？　変ってどんな風に」
「なんか、死にそうかも」
「ふーん」
「！？」
ガーン
「お、俺が死んだらト、トーコのせいだぞ！」

「ええ？　なんで？」
「トーコがパソコンばっかやってて、俺のこと全然かまってくれないからだ！」
「はいはい、嘘乙、嘘乙」
「っ！！」
ガーン
「そもそもわたしが構わないとルシファーが死ぬっていうのが意味わかんない」
「それはだな！　俺は寂しいと」
「『寂しいと死んじゃうからだ』とかくだらないこと言って人のＰＣの邪魔したんならどつきまわす」
「っ――！」
図星か。

※ルシファーとトーコさん
「るーしふぁっ」
ぎゅむっ
「ふ、ふえ！？　ト、トーコどうしたんだ、急に抱きついてきて」
どきどき
「えへへ～、聞いてくれる？」
「お、おう」
ごきげんなトーコかわいいなぁ……。
「ジャーン！　今日発売の予約特典付き新作乙女ゲームがさっき届いたのー！」
「え……？」
「今回のは絵師さんもシナリオライターさんも、すっごく好きな人でね、声優さんも有名な人ばかりだし、なにより私のお気に入りの人ばかりで、ルートによっては逆ハーエンドもあるらしいし、うわ

ぁ、もう誰から攻略していいかわかんないよ、コノヤロウ！」
うふふ、うふふ
「あ、あのトーコ？」
「っていうわけで、ルシファー、わたし今から部屋に籠もるからしばらく入ってこないでね」
「えええっ、トーコ、俺のメシは！？」
「誰でも好きな人のところ行ってもらってくれば？」
「好きな人って、俺はっ」
「あ、そういえば咲さんが今日空いてるみたいなこと言ってたっけな、ちょうどいいや、ルシファー彼女のとこお泊りしに行きなよ」
「ちょ、トーコ！」
「ちゃんと礼儀正しくするんだよ？　ルシファーがアホなことしたら、飼い主のわたしまで非が及ぶんだからね。お行儀よくして。はい、それじゃ、行ってらっしゃーい」
「トーコぉぉぉ！」
ルシファーはトーコ以外にも血液提供者がいます。しかもみんな美人（お約束）。

※ルシファーとトーコさん
今日はルシファーの誕生日。
「トーコー」
「なに？」
「俺、今日誕生日だぁ」
「へー」
「……へーって、それだけ？」
「ん？　ああ、誕生日オメデトウ。いやあ、メデタイメデタイ」
「ええー！」
「ええーってなによ。なんか欲しいものでもあるの？　あんたなん

だかんだいってお金持ちなんだから自分で買えばいいじゃん」
「つ、冷たい！」
「ああ、ごめんごめん。聞いてあげるからそんなところで床に『の』の字かかないの。部屋の中が暗くなるじゃない。で、何が欲しいわけ」
「トーコ！」
「うん？」
「ええと、トーコ！」
「……？　何、ちゃんと聞いてるから早く言いなよ」
「え、ええ？　えっと、だからトーコ」
「はい？」
「俺、トーコが欲しい！」
「はあ？」
「……」
「え、えと……」
「……」
「……」
「あ、あの、スミマセンデシタ……」
「わかればよろしい」
飼い主に下克上しようとするなんて百年早いわ。

※ルシファーとトーコさん
今日はトーコさんの誕生日。
「トーコ！　トーコ！」
「んん、なに？　こんな朝っぱらから……」
「トーコ、今日は何の日だと思う！？」
「んー？　さあ」
「ふっふっふー、駄目だなぁ、トーコは。ハッピバースデー、トーコー！　さーて、トーコは一体今日で何歳になっ」

「女性に年聞く馬鹿は滅べ」

※ルシファーとトーコさん
「トーコぉ」
「ん？」
「なあ、なんでトーコは『おとめげぇむ』ばっかりやってるんだ？
『にじげん』のやつらなんかよりも、現実にもっといい男が沢山いると思うんだ。ほら、例えばおｒ」
「ねえ、ルシファー」
「うん？」
「喧嘩売ってるなら買うけど」
「え？　えぇ！？」
なんでそんな話になるんだ？！
「二次元馬鹿にするやつは地獄に落ちろ」

※おにいちゃんとトーコさん
ルシファーには百と二十二歳年上の兄がいる。
「トーコちゃん」
「……あ、どうも。こんにちはオーギュストさん」
この人苦手なんだよなぁ。
「つれないなぁ、もっと気軽にオーちゃんって呼んでくれていいのに。あ、もちろん呼び捨ても可だけど」
「え？　オッちゃん？」
「……天然なところも相変わらず可愛いね、トーコちゃんは」
「いや、わざとですけど」
「そうだ、ところで俺の可愛い弟は元気にしてるかな？」

「スルーですか」
「君のような美しい人の家に居候なんて、実に羨まし……げふんげふん。そうだ、今から弟の顔を見に行きがてら君の家に」
「すみません、家狭(ウチ)いので弟さんとの再会は外でお願いします」

※ルシファーとトーコさん
お食事中。
「ん……」
「……」
「ねえ、ルシファー」
「うん？」
「わたしの血ってそんなにおいしいの？」
ふと気になって問いかけると、ルシファーはわたしの首元にうずめていた顔をあげて、満面の笑みを浮かべた。
「ああ、美味いぞ！　俺こんなに美味い血は初めて飲んだ」
「そんなに？」
「トーコに初めて血もらったときな、俺あまりの美味さにうっかり全部飲み干しそうになったんだ。こんなことは滅多になくて、いつもちゃんと自制して飲んでるんだけど、でも、あの時は本当にやばかった。ギリギリのとこで踏みとどまらなきゃ、今こうしてトーコの血を味わうこともできなかったかもしれないもんな。それくらいトーコの血は美味くて、今でもちょっと気を抜くと我慢できなく……、あれ？　トーコ、どうしたんだ、そんな顔して」

ルシファーとトーコさん02（吸血鬼×オタク女子※会話のみ）

俺は今、一人の人間に飼われている。

数週間前にとある事情で行き倒れていた俺は、片桐陶子（カタギリトウコ）という人間に拾われた。トーコはこれまでに味わってきたどんな人間よりも美味い血液の持ち主で、俺はもう一口飲んだ瞬間にその味の虜になった。トーコはPCやゲームばかりしていて俺のことなんか全然構ってくれないし、地味で目立たない顔してるけど、でも本当にすっごく美味い血の持ち主で、時々殴られたりするけど、機嫌がいいときは頭を撫でてくれることもあるし、ご飯も作ってくれたんだ！

この間、俺はトーコの血が一番好きなんだけど、一応普通のご飯も食べれるから、そのことを言ったらトーコは自分の食べてた“かっぷらーめん”っていうやつを俺にくれて……ん？　あれ、トーコが呼んでるから、また今度な！

※トーコさんと咲（サキ）さん

「あ、咲さんお久しぶりです」

「あら、トーコちゃん。こんばんは。ルシファーはお留守番？」

「あ、いえ今日は祥子（ショウコ）さんのお家にお泊りするって言ってました」

「ああー、あのオバさんね」

オバさん……。

「さ、咲さんて祥子さんのこと」

「別に嫌いじゃあないわよ？　ただ、あの人派手じゃない？　いい年してあの格好はないと思うのよねぇ。それに香水くさいし」

咲さんも人のこと言えないんじゃないかなー。

「なによりルシファーの愛人ってみんなキャラ被ってて嫌なのよね」

“みんな”ってことは自覚あるのか。

「皆さんキレイな方が多いですよね」

色気たっぷりな美人さん揃いで羨ましいわ、正直。
「でも私トーコちゃんは好きよ」
「どういう意味ですか、それ」
ルシファーの血液提供者（＝愛人）は妖艶美人なお姉さんタイプが主です。
面食いめ。

※おにいちゃんとトーコさん
「やあ、奇遇だねぇ、トーコちゃん」
「……」
「いやだなぁ、そんなに嫌な顔しなくてもいいじゃないか。そんなに俺のことが嫌い？」
「美形という人種が苦手なもので」
「ふうん？」
「……なんです、その何か言いたげな目は」
「いや、ルシファーも世間では充分美形の部類に入ると思うんだけどね」
「あれはただのペットですから」
「なるほど」

※ルシファーとトーコさん
「トーコぉ……」
ぎゅむ。
「まとわりつかないでウザイ」
「トーコ構って。今日満月が近いから人肌恋しくてたまらない」
「愛人さんのとこに行ってくれれば？」

「俺、今日はトーコがいい」
「っあああああ！」
「！？」
びくっ
「ちょっと、ルシファーが引っ付いたせいでミニゲーム失敗しちゃったじゃない！　どうしてくれんの！」
「ゲームなんかやめて俺の相手をすればいいとおも」
「変なことほざいてると埋めるぞ」
「埋め……！？」
どこに！？

※ルシファーとトーコさん
「ルシファー、今日友達くるからちょっと外出ててくれないかな？」
「！？」
ガーン！
「トーコ、俺のこと友達に見られたくないのか？！」
「うん」
ガーン！
「なんでだ」
「ええ？　なんでって……むしろ、ルシファーはいいの？」
「？」
「今日これからオタクな友達と集まってめちゃくちゃマニアックなアニメ上映会した後、そのアニメについての感想言い合って、みんなが持ち寄った同人誌アンド乙女ゲーム（十八禁含む）を読んだり貸したりしてかなーりディープな夜を過ごす予定なんだけど、あんた耐えられる？」
「イ、イッテキマース」

※ルシファーとおにいちゃん
「るー、しふぁー」
「あ、オーギュスト兄ちゃん」
「久しぶりだなぁ、お前元気にしてたか？」
「おう！　元気満々だぁ。今日はトーコが二日ぶりに血をくれたからな、とっても気分がいいんだ！」
「おおー、それはよかったなあ。お前いつもトーコちゃんの血美味い美味いっていってるもんなあ」
「トーコの血は世界一だ！」
「そっかそっか、よし、そんなに美味いなら今度俺も」
「陶子に手を出したら灰にするぞ」
「……」
おまっ、そんな顔でにーちゃんを睨むなよな……。

※ルシファーと咲さん
「ルシファー」
「ん？」
「なに考えてるの」
「トーコのこと」
「ほぉー」
ぎゅぅ
「いてっ！　なんで抓った！？　咲！」
「なんでもなにも、自分といる時に男が他の女のこと考てたら普通はいい気しないわよ」
「そ、そっか。悪い」
「どういたしまして。ルシファーの正直なところ好きよ、私」

にっこり。
「で、どうしたの？」
「うん？　なにが」
「あの子と、トーコちゃんとなにかあった？」
「え？　うえ？　ええと、咲、今トーコのこと考えちゃ駄目って」
「私が話題振る分にはいいの。で？　喧嘩でもした？」
「喧嘩って言うか……」
「なに？」
「今日、トーコが寝言で『私もう二次元に移住する！』って言って……」
「……」
「トーコが『にじげん』の世界に行っちゃったら俺どうすればいいんだろう。トーコの血は好きだし、トーコ自身も大好きだけど、でも俺『にじげん』の世界の行き方わからないし、いま咲といる間にトーコが一人で『にじげん』の世界に行っちゃったらって思うと、俺いてもたってもいられなくて……」
「大丈夫よ、絶対にないから」
何ていう寝言を言うんだ、あの子は。

※ルシファーとトーコさん
「な、なあトーコ」
「んー」
「俺は今日、素晴らしい言葉を覚えたんだ」
「なに？」
「俺はトーコのことを好きだけど、今まであまりに好き過ぎてそれを上手く言い表す言葉が見つからなかった。でも、今日この想いを表現するピッタリの言葉を見つけたんだ！」
「ねえ、ルシファーそれって……」

「トーコ、俺はお前のことが『食べちゃいたいくらい好」
「黙れ」
言うと思ったわ。

愛について（おっさんと幼女）

ロウは困っていた。
今日は一日、仕事を休み、家でのんびりしようと考えていたのに、思わぬ来客にそれを台無しにされた挙句、来客の置き土産のせいで自分は今、犯罪者になるかならないかの瀬戸際に立たされている。

「ミスター、ロウ。固まっていないで早く私の告白に対するお返事をいただきたいのだけど」

頭上から降ってくるのは天使のフリをした小悪魔の声だ。
金の巻き毛に父親譲りのエメラルドの瞳。瞳以外は全て絶世の美女と名高い母親譲りの面差しをしたこの少女――否、幼女は今、ロウの腹の上に乗っかって彼を脅していた。

「リゼル、とりあえずそこを退いてくれないだろうか」
「嫌よ、あなたが私の告白にイエスと返すまでここを動かないわ」

風呂上りのロウを紐で引っ掛けて転ばせた挙句、リゼルは彼の体に圧し掛かり熱烈な愛の言葉と強烈な脅し文句を吐き出して“犯罪者になるか自分の恋人になるか選べ”と告げた。ただ幼い少女に圧し掛かられただけなら、自分の手で彼女を退けて起き上がればいい話なのだが、彼女の片手には通報用の番号が押されたピンクのジュニア用携帯電話が握られ、彼がノーと告げた瞬間に発信ボタンを押し警察に通報すると脅してくる。
半裸の男（風呂上りだからまだ服をしっかりと着ていないのだ）の上に幼女がまたがっているとなったら、確かにちょっと誤解を招きそうな状況である。

「ええと、リゼル。なにか不満なことがあったのかな？　私は君になにか嫌われるようなことでもした？」

ロウはできるだけ優しい声を出してリゼルに尋ねた。

確かに今日一日、子守を押し付けられたということに厄介だなと思いもしたが、それは友人たちの手前、しっかり押し隠し表向き快く彼女を預かったつもりだ。けれど、彼女にはその私の本当の気持ちがばれてしまっていたのだろうか？　それとも、遊園地――彼女が行きたいと所望した――に行く準備をするからと風呂に入ったのがまずかったか？　起きたばかりだったのでさっぱりしてから外出したかったのだが、入浴中、一人で待たされたのがそんなにも苦だったのだろうか。

幼い子と普段あまり関わる機会のないロウには、なにが彼女の機嫌を損ねたのかさっぱりだ。

けれど、リゼルは尋ねてきたロウに不可解そうに眉根を寄せて「別に不満なんてないわ」と首を振った。

「不満がないならどうしてこんな嫌がらせ――じゃなくて悪戯をするんだい？」

「悪戯なんかじゃないわ。言ったでしょ、私はあなたに告白をしているの」

告白――。

告白とはこんなにもヒヤリとして嫌な汗が流れるものだっただろうか？　ロウはしばし頭を悩ませた。

「私、あなたのことが好きになってしまったの。私のダーリンになってちょうだい」

「それは、ままごとかなにかの相手をしろということかな？」

「ままごとじゃないわ！　本当の恋人よ！」

憤慨して声を上げるリゼルに、ロウはその拍子に彼女が携帯の発信ボタンを押してしまうのではないかとまた冷や汗を流した。
本当の恋人だって？　そんなの、今通報されなくともいずれ捕まってしまうじゃないか。それに、自分は小学校にも上がっていないような幼稚園児と付き合うような趣味はない。

「未成年でも結婚の約束をしてあれば交際しても罪にはならないと聞いたわ」
「あのねえ、リゼル……」

どこでそういった知識を身につけてくるのか、この子は。ロウはリゼルの教育環境を心の底から心配した。

「君と私ではどのくらい歳の差があるのか、わかっているのかい？」
「たしか二十五、六歳くらいだったかしら」
「そう、私は君の両親と同じ三十歳。そして君はまだ学校にも通っていない五歳児だ」
「愛があれば年齢なんて関係ないわ、ミスターロウ」
「愛があれば、ねえ……」

こんな子どもが“愛”など本当に分かっているのだろうか。ロウは嘆息してリゼルを見上げた。

「リゼル、そもそも君は本当に私のことが好きなのかい？」

馬鹿にされたとでも思ったのか、「どういう意味？」リゼルは少し恐い顔をしてロウを睨みつける。

「私たちは、今日初めて会ったばかりじゃないか」

「愛に時間なんて関係ないわ」
「そうだね、でも君は私の何処を好きに？　私は君に好かれるようなことなど何一つしていないと思うのだが」
「会った瞬間恋に落ちてしまったの。きっと私たちは結ばれる運命だったのよ」
「運命……」
「そう、運命。あなたを見た瞬間ビビビッ！　て体に電流が走ったの！」

その妙な電波のせいで、私は今こうして脅されているというわけか。
言うことだけは立派なリゼルにロウは内心拍手を送りながら、そういえば彼女の母はメロドラマが好きだったな、と思い出した。おそらくリゼルのこの語彙力はそのメロドラマから得てきたものだろう。幼い子どもには御伽噺こそがふさわしいと思うのだが、道理で陳腐な言い回しが多いはずである。

「それじゃあリゼル、愛する私のために、君はなにをしてくれる？」
「え？」

リゼルはキョトンとした表情を浮かべてロウを見下ろした。母親そっくりのぱっちりとした大きな瞳が、ロウを映し出す。
「求めるだけが愛情じゃない。それとも、君の言う恋愛は相手からなにもかも奪い、与えてもらうだけのもの？」

ロウが小首を傾げると、リゼルは愛らしい桃色の頬を膨らませる。
「馬鹿にしないで、ミスターロウ。私、あなたのためならなんだってしてあげられるんだから」

「じゃあ、その携帯電話を放してくれないだろうか」
「それはダメ」
即答される。
「……言っていることとやっていることが違わないかい？」
「時と場合によるのよ、ミスターロウ。これはあなたを私のものにするための大切な手段なのだから、あなたが恋人になってくれたら、私は何でも言うことを聞いてあげる」
ふふ、と幼子に言い聞かすように言うリゼルに、「脅して相手を手に入れるのが、君の言う愛なのか？」ロウはついなじるように言葉を紡いだ。
「え？」
リゼルはほんの一瞬驚いたような表情をつくる。が、すぐに笑顔を取り戻すと「じゃあ逆に聞くけど、あなたが思う愛とはどんなものなの？　ミスターロウ」と小首を傾げた。さきほどの反撃か、まさかそうくるとは思いもしなかったロウは、ふっと苦い笑いを落とした。
――まさかこんな子どもに愛を問われるとは。
しばしの後、ロウは自分でも驚くほど真摯な声で彼女の質問に答えていた。
「……好きな相手が幸せになれるように祈ること、かな」
「え？」
脳裏に浮かぶ、目の前にいる少女とそっくりの、絶世の美女と謳われる女性の姿。

「例えそれが別の男といる幸せであっても、私は愛しい人の幸福を願う。愛しい人の幸せこそが、私の幸福なんだ」
「……それが、あなたの思う愛？」

訊ねてくる少女に、ロウは「そうだよ」と頷きを返す。

「……ミスターロウ、あなたって」
「ん？」
「不毛だわ」

ばっさりと切り捨てられ、ロウはしかし、ただ苦笑を浮かべ「本当に」と返す。
今の今までリゼルが自分の言っている言葉を本当に理解して使っているのか疑問だったのだが、どうやら彼女はロウが思うほど子どもではないらしい。少なくとも、二十五歳も年上の男の、不毛な片思いを見破れるほどには。

「君は将来、いい女になれそうだね」

言うと、リゼルは顔を真っ赤にして「当たり前だわ」と呟いた。
それから、深い深い溜息を落とすと、

「いいわ！　今日のところは諦めてあげる」
「え？」

一体全体どういう風の吹き回しか。頑としてロウの上から動かなかった少女はあっさりと身を引いて立ち上がった。

「今日のところは諦めてあげるといったのよ、ミスターロウ」

ついで、先ほどまでロウを脅していた“手段”である携帯電話を、電源を切りポケットに入れてしまう。

「愛しい人を犯罪者にするのは、私も本意ではないしね。……だから、もう少し私が大人になったとき、ピチピチの肉体で初老のあなたを落としに来てあげる！」

「……それは、喜んでいいことなのだろうか？」

「他人の幸せを願うあなたを、いつかきっと私が振り向かせて、幸せにしてあげる」

にっこりと笑う少女に、ロウはついつられて「それは、楽しみにしているよ」と呟いてしまった。

数年後、彼女は約束通りロウの前に現れる。

母親にそっくりな姿かたちで、父親ゆずりのエメラルドの瞳を輝かせて、そして彼女にしかできないとびっきりの笑顔を浮かべて。

「愛してるわ、ミスターロウ。約束通り、あなたを幸せにしに来たわ」

まるで御伽噺に出てくる魔法使いのように、ロウのところに愛と幸せを運びにやってくる。

代理巫女始めました（年下王子×平凡女子）

01

幼馴染の律子はなんだかとてもミラクルな女性だった。
宝くじを引けば一億円があたり、外を歩けば御曹司と出会いがしらにぶつかり、求婚される。小さい頃から幸福が服を着て歩いているような彼女に、次はどんなミラクルが彼女の身に降り注ぐのだろうと、私は密かにわくわくしながら見守っていた。
そうして二十歳をすぎたある日のこと、彼女はとんでもないミラクルに行き当たった。

「異世界！？」

なんと、私たちの住む世界とは別の世界から巫女としてそちらに来てもらえないかと打診を受けたというではないか。
いやあ、実にミラクル！　彼女と付き合いの長い私でも流石にそんなことが起きるなんて予想だにしなかった。

「わー、オメデトウ。ついに異世界進出まで来ましたか、で今のお気持ちは？」

テレビのインタビューよろしく他人事のような気持ちで訊ねた私に、律子はにっこりと微笑んで頭をかいた。

「いやー、私も流石にここまで自分が凄いと思っていなかったわ」
「ですよね、ですよねー」

なかなか異世界から召喚を受けるなんてあることじゃないですよ。

「で、行くの？　どうするの？」

あくまで他人事。わくわくしながら聞いた私は、その次の律子の言葉にしばし固まることになる。

「うーん、異世界生活も楽しそうだけど、私には御曹司との結婚生活があるから代わりに朝子、行って来てよ」

――はい？

「大丈夫、先方にはもう代役立てる話はしてあるから。あちらは地球人なら誰でもいいそうだし、朝子は私の大切な親友だからきっと上手くやっていけるわ」

ええと。最後の親友だからのくだりはあまり関係ないような気がするんですがって、そうじゃなくて！

「律子！？」

「それに朝子前から異世界トリップしたいとか言っていたじゃない？　その手の本大好きだったし」

「うん、まあ行きたがっていたけど、でもそれはあくまで仮定の話で……！」

反論しようと言葉を紡いだ時、

「古川朝子（こがわあさこ）さま、ご準備の方整いましたでしょうか？」

世にも不思議な格好をした魔術師っぽい男の人が律子の後ろに現

れた。

「あ、ご苦労様。今話し終わったところだから」

いやいやいや、まだこっちの話は終わってませんが。

「そうですか、では、参りましょうか」

「ちょっ」

参るって、どこへ！

「西の王国、リューンへ」

「西の王国って、それ何処の世界の西のこと！？」

最後の突っ込みは果たして律子に届いただろうか。

私は一瞬の内に異世界へと連れ攫われ、そうしてやってきたのが西の王国リューン。

緑が生茂り、自然溢れるこの国で律子に代わり代理巫女をすることになってしまいました。

一体どうなることやら……。

02

とある異世界に存在する、西の王国リューン。

そこは緑が生茂り、自然が溢れ、生活している人々の暮らしは平和そのもの。

敵に攻められたり、魔王に支配されかけていたり、そんな国の危機？　なにそれ美味しいの？　な穏やかな国に親友の代理巫女とし

て召喚されてしまった古川朝子（こがわあさこ）、二十二歳。
――わあ、異世界に永久就職？　就職活動で行き詰っていたから丁度いいやー

「……なんて思うわけなかろうが！」

まさかの異世界初体験に、朝子の頭と心は激しく動揺。これから一体、私になにをしろというのか。
朝子をここへ連れてきた魔術師曰く、

『アサコ様はこの国にいてくださるだけでよいのです。我が王国は数百年前、迷い込んだ異世界人を国に保護したことから長き繁栄を得、それ以来定期的に異世界から巫女様をお招きしており……』

いるだけで繁栄を得られるって、私は招き猫かなにかか。
そりゃあ、ずっとこちらに居続けなきゃいけないのなら、家族や夫のいる律子には無理なのだろうけども。いくら親や夫、恋人がいない私だからって流石に一生異世界で暮らすのは厳しいものがあるぞ！
それに、もう律子に会えないっていうのも

「寂しいじゃないか……」
「あら、かわいいこと言ってくれるのね」
「！？」

ぽつりと一人呟いたはずの言葉に応えが返され、私は驚いて振り返った。
広い、広い“巫女様”専用の部屋。その中には、確かに私一人しかいないはずだが「あ、こっち、こっちー」と耳に馴染んだ律子の声がどこかから聞こえてくる。

「律子……？」

声を頼りに室内を探し回り、行き着いたのは大きな鏡の前。
恐る恐る覗き込んで見るとそこにはなんと律子の姿があるではないか。

「なっ！？」

背後の景色から察するに、どうやら彼女はどこぞのリゾート地にいるようである。

「って、人を異世界に放り込んでおいて、あんたは優雅にバカンスか！」
「えへへ、新婚旅行なんだー」

照れながら翳される左手には銀色の結婚指輪。お前というやつは……。

「で、どう？　どう？　異世界トリップして一月ほどたちましたが、その後の様子は」

くそう、こいつ絶対に楽しんでやがる。
今まで他人事のようにしてきた私に対する報いか。

「別に、これといってなにか特別なことはないよ。ていうか、なんで律子、鏡の中にいるの？」
「それはねー、朝子が寂しがるんじゃなかろうかと、魔術師さんにテレビ電話ならぬ鏡電話？　らしきものをお願いしたのさ」

なんだか曖昧だな。

「これで朝子が異世界にいてもいつだって会えるよ」

「うう、それだったらなんでもっと早く顔を出してくれないのさ」

「だってそんなに早く顔を出したら朝子ホームシックにかかるでしょ、それに設備が整うまでに色々と時間もかかってね」

うぐ、そ、そうなのか。

「ねえ、私そっちの世界に戻りたいよ。こっちには律子もいないし、それに――」

鏡にこつんとおでこをつけて弱音を吐きかけたそのときだった。

――ズバン！　と勢いをつけて朝子のいる部屋の扉が開かれる。

「アサコ！　アサコはどこだー！」

――ああ、うるさいのが来た……。

大きな声で入ってきた侵入者――ならぬ来訪者は、ぐるりと室内を見回した後、鏡の前に佇む朝子の姿を認め、走って近寄ってきた。

金色の癖のある短い髪と金色のキラキラとした瞳。王族だけに受け継がれるというその美しい色素を有するこの若者は――正直眼を疑いたくなるが――正真正銘、西の王国リューンの王子様。

「レオルト様……」

朝子がげんなりとした視線を返すと、レオルト殿下はにっかりと笑い「そんなかしこまらずとも、気安くレオと呼んでいいと言っているではないか」という。

若干十四歳、若いからか元からの性格なのか、人懐っこいのはい

いが、あまり無茶を言わないでほしい。

「殿下、お久しぶりでーす」

「おお、リツコ殿と話していたのだな。うむ、実に久しぶりである」

鏡の中から手を振る律子に、殿下はまたニカッと爽やかな笑みを浮かべて手を振り返す。

実はこの律子の代わりになった（ならされた）巫女という役目、ただ国に招かれ異世界で暮らす……だけでなく、もう一つ重要な役目が存在する。それは、

「どうです？　殿下、朝子はなかなかにいい女性でしょう？」

「ああ！　まことに。朝子は少し地味だが、よーくみれば可愛らしいところもある。よい妃になりそうだぞ」

――地味は余計だ、地味は。

そう、巫女の大切な役目、それは王子と結婚してこの国の王妃となること。この国にいるだけでいいだなんて魔術師の嘘つきめ……。繁栄の為には、王族の血に異世界の血を混ぜることが必要なのだとか。

律子を召喚した当初、彼女は結婚はしていなかったが既に御曹司と婚約済みで、婚前交渉の方も済ませてあったので、王子の嫁として好ましくないと判断されたらしい。

そりゃあ、私は年齢イコール彼氏いない暦で、生粋の生娘ですが。だからって八歳も下の、それも異世界の王子様の嫁になるなんて無茶な話――

「あのう、王子、私やっぱり」

今からでも巫女の座を辞退したいのですが。

そう口にしようとした朝子は、けれど「アサコ！」大きな声で名前を呼ぶ殿下に遮られ、その機会を失った。

「なんですか、王子……」

はあ、と溜息をつき顔を上げると、殿下が「あれ、あれをみろ！」と律子の映った鏡の中を指差す。

「あれ？」

殿下の指差す先を同じように覗き込めば、そこには青く美しい海が波打っている。

くそう、律子のやつ。自分だけ幸せそうで、ずるいぞ！

「海がどうしたんですか、王子」

「海だ、海へ行こう、アサコ」

「……は？」

朝子はきょとんとして王子を見つめ返した。王子の顔には相変わらずどこかの運動部男子のような爽やかな笑みが浮かんでいる。

呆ける朝子を他所に、王子は彼女の手を取ると「さあ、海へ行くぞ！」ともはや決定事項で外へと走り出した。

「えっ、ちょっ！」

我に返った朝子が声を上げるが、そんなことお構いなしだ。

走り去っていく二人を見ながら、鏡の中に取り残された律子がぽつり。

「本当に、朝子が好きなのねえ……」

実はこの代理巫女のお話し、律子から言い出したものではあるが、代理として朝子の写真を見せた瞬間王子の方がノリノリの乗り気になった。

律子のようなぱっと人目につく美人ではないけれど、愛嬌がありつ素朴で可愛らしい朝子を王子は一目見て気に入り「すぐにでも巫女として招きたい！」とあっさり律子の提案に承諾したのである。

その後はあっという間に事が進み、今現在王子は無邪気さを装いながらも手練手管を駆使して朝子を落としにかかっていることだろう。

――あのぼんやり屋な朝子がいつまで抵抗できるか。

リューンは平和でいい国だし、王子は朝子を命に代えても大切にすると誓ってくれた。朝子に言ったら勝手に人の運命を決めるなと怒られそうだが、でもあの孤独で意地っ張りな親友は強引にことを進めない限りいつまでたっても本当に大切な人を作ろうとしないだろう。親を亡くした過去のせいか、朝子は大切な人を失うことを恐れるあまり自らすすんで人と関わろうとしない。

律子に対しても、そうだ。律子が御曹司との結婚を打ち明けた時や、異世界召喚の話をした時、彼女は一見わくわくと話を聞いているように見えたが、内心では律子が自分の側からいなくなってしまうのではないかと、恐ろしくてたまらなかったはず。

――でも、私はいつまでも朝子の側にはいてあげられない。

電話やメールなどのやりとりはできるだろうが、旦那様について海外に移住する為、もう今までどおり頻繁に会うことはできなくなってしまう。

だから、その代わりに――私の代わりに朝子の隣にいてくれる人を、朝子を支えてくれるその役目をレオルト王子に託した。

「アサコー！　アサコは泳がないのか？」
「いやいやいや、水着持ってませんし。ていうか殿下、そんな高いところから飛び込んだりしたらあぶなっ！　うあああああ！」

――王子、私の大切な親友を悲しませたりしたら許しませんよ？
――当たり前だ、歳の差はあれど、私には愛がある。私がアサコを世界で一番幸せにしてみせるからな！

そんな風に、親友と王子の間で交わされた会話を知りもせず、今日も朝子は親友の代理巫女として異世界ライフを（渋々）送る。

my dear（女の子とアンドロイド※イントロのみ短文）

自称天才発明家の叔父は、昔からなにかとへんてこなものを作っては周りを驚かせていた。大部分が趣味だったのだろうけど、今思うと両親を早くに亡くしたあたしの悲しみを紛らわそうとしていたのかもしれない。

あの日も、叔父は研究室と称した自室にこもって何かを作っているところだった。何を作っているのか聞いても、はぐらかすだけで答えてくれなくて、ただ笑って

「完成したら志保にプレゼントするから、楽しみにしてて」

とだけいった。さっきも言ったけど、叔父の作るものには本当にへんてこなものが多く、それを聞いたあたしは当然喜ぶどころか複雑な表情を浮かべたのだった。

そして十九歳の誕生日――

ピンポーン

それは呼び鈴と共にやってきた。

「はじめまして、私は楓。今日からお世話になります」

玄関を開けると同時に挨拶をして頭を下げた好青年を、志保はぽかんとしながらただ見つめていた。

身長一八〇センチあるかと思われる長身なのに、すらっとしたバランスの取れた体格をしていて威圧感を感じさせない。髪は綺麗な鳶色で、優しげな目元が人懐っこさを感じさせる。微笑まれたら思わず赤面してしまうこと間違いない。

そんなイケメンが、どうして自分の家を訪ねてきたのだろう。さらには「今日からお世話になります」なんて、一体なんのことだか志保には全然分からなかった。

「あ、あの……人違いじゃ」

困惑しながらそう告げてみるけれど、目の前の好青年はにっこり笑って首を横に振った。

「いいえ、貴方であっていますよ。唯川志保（ゆいかわしほ）さん。私は貴方の叔父の唯川俊（ゆいかわしゅん）氏に言われてここにきました」
「唯川俊……」
確かにそれは叔父の名前だった。中学のときに両親を亡くした志保の親代わりで、つい一年ほど前まで一緒に暮らしていた人。志保の大学の入学式が終了すると同時に「ちょっと旅に出てくるよ」とふざけた一言を残してどこかへ行ってしまい、それ以来行方不明の音信不通という困った人物である。
そんな叔父とこの好青年が知り合い？　ますますわからなくなってきた。
身内でもちょっとこの人おかしいんじゃないだろうか、と疑ってしまう変人の叔父と目の前の青年がどうにも結びつかない。本当なにか勘違いしてるんじゃ？　同姓同名の別人とか。
志保の様子を察したのか、楓は更に言葉をつむいだ。
「以前、俊氏があなたになにかプレゼントを贈るといっていませんでしたか？」
「え？　ああ、そういえば……」
確かに、出かけていくちょっと前まで何かを作っていたなあ。中身こそ教えてもらえなかったけど確か完成したらあたしにくれるって……。
「もしかして、あなた宅配便の人？」
それならつじつまが合う。それにしては思いっきり私服だけど、まあいいや。ようやく納得して印鑑を取りに部屋の中へ戻ろうとするが、しかし楓はあっさり否定した。
「違いますよ、宅配便じゃありません。だから印鑑もサインも不要です」
「えと、じゃあ叔父の知り合いで、代わりに荷物を届けにきてくれたとか……？」
「いいえ、それも違います」
「じゃあ、その……どういったご用件で？」

「先ほども言いましたが、今日からこちらでお世話になることになりました。俊氏からの貴方へのプレゼントはつまり、この私自身なんですよ」
……はい？
「私は唯川俊氏が発明したG-258型アンドロイド、楓。一人暮らしでなにかと物騒かと思った俊氏、私のマスターが貴方を守るために私を作ったのです。炊事、洗濯、家事、掃除、その他諸々、大抵のことはできるようにプログラムされていますのでなんでもお言い付けください」
「はあ……？」
「ご理解いただけましたか？」
「ちょ、ちょ、ちょ、……ちょっと待って、え、なに、今なんて、アンドロイド……？　なに？」
あたしの目の前にいるこの好青年がアンドロイド？！　しかもあたしのために叔父が発明したなんて、そんな――
「そんなの理解できるわけないでしょ！！」
おもわず声を荒げる志保とは正反対に、楓は落ち着いた様子で
「でも、事実ですから……」
といって証拠とばかりに片方の腕をはずしてみせた。
「？！」
驚きすぎて悲鳴も出ない。人間のものとそっくりのその腕は、体から離れたというのに出血ひとつせずに、いろんな色のコードが幾筋も連なっているのが見えた。グ、グロイ……。
「信じて、いただけましたか？」
「は……はい」
にっこり笑う楓に、志保はこれからの生活を思って途方にくれたのだった。
さよなら、あたしの平穏な日々……。

図書室と黒猫（先輩と後輩※６００字の短文）

学校の図書室には、猫のような美少年がいる。
真っ黒な髪の毛と、猫のように釣りあがった瞳。
黒猫を連想させる外見に、中身も猫のように気まぐれで気高い性格をしている。
「先輩」
文庫本越しに彼を観察する私に、彼は眉根を寄せて不快感を表す。
非難の視線と不機嫌な声に、しかし動じることなく観察を続けると今度はチッと舌打ちが聞こえた。
おお、ガラの悪い猫だこと。
「先輩、不快です」
「おお、スマンネ」
感情のこもらない謝罪に、彼はまたチッと舌打ちをする。
そしてついには席を立って図書室を出て行ってしまった。

「……先輩」
翌日、昨日はあまりにもわざとらしすぎたかなと反省し、今度は本棚越しに彼を見つめていたら、やはり見つかってしまって睨まれた。
ちぇ、本棚越しに見るくらい許してくれたっていいのに。
「先輩、ストーカーとして訴えますよ」
それは困る。
すぐに視線を逸らすが、数分後、私の視線は再び彼を捉えていた。
「先輩、うざいです」
「うん、私もそう思う」
だけどどうしても私の瞳は君に吸い寄せられてしまうのだ。
「……はあ」
美少年は深い溜息を一つ吐いて、座っていた席を立った。

また出て行ってしまうのかな？
残念に思いながらも、引き止めることなく見守っていると、予想に反し彼は私の方へと歩いてきた。
そして、私の足元へと腰を下ろす。
「……えーと」
どうしたのかしらん。
戸惑う私に美少年は本を開きながらポツリ。
「もう好きなだけ見ればいいですよ」
「いいの？」
「諦めました」
投げやりに言う彼に、私は近所の野良猫を連想した。
警戒心の高い猫が懐いた瞬間ってこんな感じかしら。

落とし穴（高校生※ゆるく、意味のない話）

ある日ある時、私は穴に落ちた。
学校からの帰り道珍しく気分のよかった私は、これまた珍しく回り道なんぞをして家に帰った。……いや、帰ろうとした。抜け道として公園を通り、あと少しで家に着く、というところでいきなり、地面が消えた。
そうして、私はちょうど自分の胸元くらいの深さがある穴に落ちたのだった。

「なんとも、マヌケな……」

穴にはまりながら私はあたりを見回した。
まさか、自分が穴に落ちるなんて……鈴木綾子、一生の不覚。
というか、誰がこんなところに穴があいているなんて思うだろう。しかもその穴はちょうど私にジャストフィットで、じたばたと体を動かすが抜け出せそうにない。
さてはてどうやって抜け出そうか、と考え込んだそのときだ。

「人が落ちてるのなんてはじめてみた」

ふと、頭上から声がする。
天の助け！
なんとか体を回転させ声のした方に体を向けると、そこには幼馴染の少年が立っていた。

「あー、谷口健太」
「谷川健人だよ」
「うぐ」

すかさず名前間違いを訂正され、呻く。
仕方ないじゃないか。彼とは幼馴染と言っても幼稚園、小・中・高校と一緒にもかかわらず一度も話したことがない奇跡の関係なのだから。

「で、鈴木綾子はなにやってんの。こんなところで」
「何故フルネーム」
「そっちこそ。間違えていたけど」

うぐ。

「み、見ればわかるでしょう。……穴に落ちてるの」
「はまってるの間違いでしょ」
「そうともいう」
「……楽しい？」

楽しいわけあるかい。

「誰が好き好んで穴になんかはまるのよ！　大体ねえ、なんでこんなところに穴なんか掘ってあるのよ。誰よ、こんなところに穴をあけたのは！　見つけ出して張り倒してやる。……あ、ねえ。ところで足つりそう。すみません。助けてください」

逆ギレしつつ助けを求めると、谷口……あれ谷川だっけ？　は呆れた顔で溜息をついた。

「最初からそういえばいいのに」

やかましいわ。乙女が困っていたらまず最初に男の方から手を差

し伸べなさいよね。
理不尽なことを内心思いながら、差し出された谷本の手に掴まる。
――が、掴まろうと手を伸ばした瞬間、谷山の手はスイッと避けられ、差し出した私の手は空しく宙を漂った。

「ちょっと！」

何で避けるのよ！　こちとら穴から抜け出そうと必死なんですけど！
睨むと、谷原は気まずげに目を逸らした。

「わ、悪い……」

悪いと思っているなら最初からするなっていうの。
もう一度手を伸ばすと、今度はしっかりと手に掴まらせてくれた。
全く、なんなんだ一体。

「それじゃ、引っこ抜くよ？」
「んー、頼みます」

再び逃げられることがないように、私の方からもがっしりと彼の手を掴み、引張られるのに身を任せる。

よいしょ、よいしょ。
まだ抜けない。
よいしょ、よいしょ。
やっぱり抜けない。

「ねえ」
「はい」

谷河の問いかけに、私は気まずげに返事をした。

「ビクともしないんだけど」

み、みたいですねー。

先ほども述べたように、穴は私の身体にジャストフィット。方向転換をすることはできるけど、どうにもこうにも抜け出すことはできない。

「……ど、どうしよ。ていうかどうなるの、私」

もしかして一生このまま？　穴から抜け出せず、雨風にさらされひっそりと一人干からびていく。

「み、みじめ……」

そんなの絶対にいや！

「よし、リベンジだ！　谷尾！　……って、あれ？」

見回せど、見回せど、谷川の姿がない。

人が悩んでいる間に、あの薄情者め！　逃げたのか！？

「うわーん！　このまま死んだら一番に化けて出てやるからー！末代まで呪ってやるうぅ」

「……さすがにそれは困るかな」

「え……？」

振り向くと、そこには逃亡したはずの谷川がいた。

しかも、手にスコップのようなもの（というかスコップ）を持っている。

「え、まさか私のためにスコップとりに行ってきてくれたの？」
「うん」
「わー、さすが谷山さま！」
「谷“川”だから」
「谷川さま！」

パチパチ拍手して持ち上げようとする私に、谷川はふと疲れたような溜息をつく。

「やっぱり、このまま放置しようかな……」
「え！　なんでっ」
「折角スコップ取りに行ったのに、放置したと思われて呪われかけてたし」
「だ、だってそれは」

なにも言わずに立ち去った君にも非があると思われるんですけど！

「しかも、何度も人の名前間違えるし」

うぐっ……。
だって人の名前覚えるの苦手なんだもの。

「ああ、もう。ごめん！　ごめんなさい！　私が悪かったです！
お願いだから助けてください」

地面に額をつけて謝ると、谷……川はようやく重たい腰を持ち上げ、穴掘りの体勢に入った。

「しかたないな。じゃ、少し待ってて」
このドＳめ！
「何か言った？」
「いいえ、何も！」

ザックザックザックザック。
思ったより柔らかい地質なのか、谷川は慣れた様子で掘り進んでいく。

「ねーねー」
「なに」
「谷川ってさ、家こっちのほうなの？」
「ちがうよ」
「じゃあ、なんでこっちの道通ったの？」
「爺ちゃんの家が、近くなんだよ」
「へー、じゃ、そのスコップも？」
「そう」

ザックザックザックザックザックザック。
ザックザックザックザックザックザック。
掘り返した土やら、泥やらで、谷川はどんどん泥だらけになっていく。

「足、平気？」
「へ？　なに？」
「つりそうって言ってたでしょ、さっき」
「あ、あー、うん。大丈夫みたい」

「もう少し我慢してて」
「はいよ」
汗をかいて、泥だらけになって、穴を掘る谷川。……こうしてみると、一度も話したことのない私のために、穴を掘ってくれるなんて彼は意外と親切なのかもしれない。まあ、見捨てたら化けて出るけどね！
「谷川って、いいやつだったんだね」
「なに、急に。褒めても何もでないよ」
「……せめて穴から私を出してくれ」
「ああ、うんそれは勿論。……一応、俺のせいでもあるし」
……え？
「あの、今なんかおっしゃいました？」
「ん？　聞こえなかったなら、別にいいよ」
「いやいやいや、よくないって。今俺のせいって言ったよね！」
どういうこと？
問い詰めるように睨み付けると、谷川は気まずそうに眼を逸らす。
おいこら、眼を逸らせばいいってものじゃないのよ！
「ねえ、どういうこと？」
「……」
にらみ合うことしばし、彼はようやく重たい口を開き言葉を紡いだ。
「俺が掘ったんだ、この穴」

「は？」
なにここにきて驚愕の事実を告白しているの、君！
親友だと思っていた男が実は俺犯人なんだ、と告白するほどの衝撃なんでですが。
「なんのために」
「池、造ろうと思って」
「は？」

これまた意味が分からない。
キョトンとする私に、谷川はザクザクと穴を掘りながら説明してくれた。
いわく、ここは谷川の爺ちゃんの家の敷地内。地元でも有名な庭師である谷川の爺ちゃんは、広い広い自宅の庭に木を植え、花壇を造り、立派な庭を造ったそうだ。我ながら完璧な庭！　自分でも惚れ惚れするような庭を造った爺ちゃんは、造った庭を誰かに見てもらいたくなった（そりゃ、上手にできたものは誰かに自慢したくなるわよね）。
そうして谷川の爺ちゃんは近所の人たちが自由に見て回れるように、庭を開放し私有の公園にしてしまったのだという（そういえば坊ちゃんだったな、コイツ）。

「それで、庭を見に来た客を捕まえようとこの落とし穴を……」
「だから、違うって！　池を造ろうとしたって言ってるでしょ」
「こんな微妙な深さと広さの池があってたまるか！」
「それは、俺……池を造るの、初めてだし」
「そもそもなんで池なんか造ろうとしているのよ」
池なんてなくても、もうすでに立派な庭だと思うんですが。爺ち

ゃんに触発されて自分もなにか作りたくなったのか？
聞くと、谷川はまただんまりと口を閉じてしまった。

「……」
「いや、別に言いたくなきゃそれでいいんだけども」
「なら最初から聞かないでよ」

ムカッなんていう態度！　おじいさん、おたくのお孫さん躾がなっていませんよ！
穴にはまりながらプリプリと怒っていると、ザクザクという穴掘り音とともに、ポツリと何か聞こえてきた。

「……話したの、初めてじゃないんだよ」
「はい？」
「一度だけ、話したことがあるんだ」

キョトンとして見上げれば、谷川の顔はうっすらと赤みを帯びていた。
一体何に照れているんだ、君は。

「……あの、なにを？　ていうか、誰が？」

しかし私には何がなんだかさっぱりわからない。
もうすこし具体的に説明してくれるかな？

「……俺と鈴木、前にも一度話したことあるんだよ」
「え、嘘。いつ？」
「一年前。中三の一学期」

中三の一学期……？

一年以上前の記憶を思い起こし、私はようやくそれらしき記憶に思い当たった。
確か中三の夏休み前にあった二者面談のとき。順番待ちでブラブラしていた私は、同じく順番待ち中だった谷川に話しかけた。気がする。

「ねえ谷口、夢とかあるの？」

その頃私は、中三だというのにまだ進路を決められずにいた。
だから参考までに近くにいた彼の進路を尋ねたのだ。

「俺、谷川なんだけど」
「……谷川は夢あるんですか？」
「……庭師、になるのが夢」

少し恥ずかしそうに、谷川は言った。

「庭師……って、庭造ったりする、アレ？」
「そう。俺のじいちゃん庭師やってて、それで」

憧れて、と小さく呟くように続ける。

「ふうん、そうなんだ。庭師かぁ、すごいじゃん。いつか池とか造ったら見せてね」
「別にいいけど」
「じゃ、約束ね」

そこですぐに私の番が来て、話は終わった。
ニ、三分くらいしか話してないのによく覚えていたな、この人。

「記憶力いいね、谷川」
「鈴木は記憶力悪いよね、何度も名前間違えるし。傷ついているんだからね、俺」
「わー、ごめんて」

何度も言うけど人の名前を覚えるのは苦手なんだって。

「全く、俺馬鹿みたいじゃん。そんな忘れられてた約束のために、毎日泥だらけになって穴掘って、一生懸命池を造って……」

気がつくと、穴は一回り大きくなっていた。

「はい、手出して」
「ああ、うん」

差し出された谷川の手を掴めば、今度は簡単に抜け出すことができた。

「さて、責任とってつきあってよね」
「へ？」

なにを？

「穴掘り」
「あ、あー穴掘り、ね」

ただしくは池堀では？
一年以上前の会話をいつまでも覚えていて、その約束のためにドロだらけになって穴を掘るヘンテコな幼馴染。とりあえず、私はもう彼の名前を間違えないだろう。

「ありがとう、谷川健人」
「どういたしまして」

忘却姫と騎士（騎士と姫君※ムダに長く鬱。Ｒ１５）（前書き）

陵辱、妊娠、自殺未遂、流産、近親相姦等々が苦手な方はお逃げ下さい。
また、ヒロインが酷い目に遭います。
そしてムダに長いです。

忘却姫と騎士（騎士と姫君※ムダに長く鬱。Ｒ１５）

少女はこの国の王女だった。継母と厳しい父親に虐待を受け、腹違いの妹には恨まれ、頼れる者は彼女付きの侍女と騎士の二人だけ。

けれど、その二人も彼女の結婚の前に侍女が騎士の子供を身ごもり、そのまま職を辞し、城を去る。

信頼していた二人の支えを失い、味方を無くした彼女は、更に政略結婚のためではあるが婚約していた婚約者まで妹に奪われてしまう。しかも、妹は彼女の婚約者を奪っただけでなく、王妃である継母の後ろ盾により王位まで彼女から奪い取った。

少女に与えられたのは、大嫌いな宰相の息子との結婚。

幼い頃から執拗に彼女に言い寄ってきた男は、念願の想い人を手に入れ、ほとんど監禁状態で彼女を閉じ込めた。

それから数年。彼女は夫だけでなく、彼女の実母を好いていた夫の父親からも陵辱を受け、その腹には父親の分からぬ子を宿していた。

――死にたい。

屈辱と絶望に満ちた日々。夫たちの愛玩人形として、かつて王女だった頃の面影もない。

ただ、ただ毎日が過ぎていくのを耐えるしかなかった、ある日。地獄のような日々は突然に終わりを告げた。

「国王軍だ！」

燃えさかる屋敷内。唐突にもたらされた攻撃は、国王の軍隊からのものであったらしい。

一体なにがあったのか、呆然とする少女に、彼女を連れ出しにきた屋敷の侍女が逃亡の道すがら夫が反逆罪で訴えられていることを教えてくれた。

――反逆罪。
屋敷の外には国王軍がずらりと立ち並び、火のついた矢が次々と屋敷へ放たれる。どうやら、国王軍は夫を捕らえるどころか、殺そうとしているらしい。
夫の危機だというのに、無感情に少女は思った。
「ぎゃあっ」
そのとき、彼女を連れ出した侍女が国王軍から放たれた弓に当たり、倒れた。周りには、自分達以外誰もいない。
急所に当たったらしく侍女は既に絶命していた。
ふと、少女は己が自由になったことを知った。
今まで自分を縛り付けていた夫たちはここにはいない。夫に代わり自分を連れ出しにきた侍女も、亡くなった。

さて、どうしようか。少女はしばし考え、ふと窓の外から水音がするのに気がついた。
少女を奪われないように、そして少女が逃げたせないように、夫は森の中の屋敷に少女をすまわせた。屋敷の三方は国王軍が囲んでいる。だが、屋敷の背面は流れの激しい川になっていた。

少女は窓を開け、下に流れる川へと視線を落とした。
国王軍に下れば命は助かるかもしれない。けれど、城には自分を嫌っている妹がいる。
これ以上惨めな生活には耐えられなかった。
お腹の子には可哀相だが、けれどもう疲れてしまったのだ。なにもかも、全て。

燃えさかる屋敷から、少女は自ら川へと身を投げる。
これで、自由になれる。
思い通りにならない現実から、すっかり汚れ果てた肉体から。

少女はうっすらと笑って眼を閉じた。

※※※

次に少女が眼を覚ました時、目の前には見慣れない天井があった。
「お、起きたか？」
視界をずらせば、ヨレヨレの薄汚い白衣に身を包んだ医者らしき男の姿が目に映った。分厚い眼鏡の向こうで、人懐っこい笑みが浮かぶ。
どうやら少女は助かってしまったようだ。
起き上がろうとすると、体のあちこちが痛む。とりわけひどい痛みを感じたのは、腹部だった。思わず腹を抱える少女に、男は気まずげに子どもまでは助けられなかった、と呟いた。
当たり前だろう。真冬の川に飛び込んだのだ。それも、激流の。命があること事態が奇跡のようなものだ。でも、今はその奇跡も少女にとっては不運でしかなかった。

名を聞いてきた男に、少女は「エマ」と本来の名の一部を教えた。男の名前はレヴァンと言うそうだ。
名前以外己のことを話そうとしない少女に、レヴァンは困ったように眉を寄せたが、しかしやがて「行くあてがないのならここにいればいい」と言った。

レヴァンは王都から程近い町で医者をしている。
エマが初めに目を覚ました場所は、レヴァンの営む病院の一室。
彼女が飛び込んだあの川は、この町の近くまで続いているそうだ。運よく川岸に打ち寄せられていたエマを町の人間が見つけ、医者であるレヴァンのもとへ運び込んだ、彼が言うにはそういうことだっ

た。

一月後、エマはまだ少し痛みはあるものの立って歩けるようになり、少しずつ病院の仕事を覚えていった。簡単なキズの処置や、病院内の清掃。なにより喜ばれたのが入院や通院してくる子ども達の相手だった。

エマは仮にも王女だったので、読み書きは一通り出来る。

幼い子ども達に本を読んでやったり、家に余裕がなく学校へ行けない子ども達に字を教えてやる。

やがて、病院裏の空き地で学校の真似事をやるようにまでなった。

無邪気な子ども達を見ると、子を失った腹が痛んだが、けれどエマは自ら川に飛び込んだのだ。子を殺した自分に、子を惜しむ権利などない。

エマはひたすらに働いた。仕事をしているときは、過去のことを忘れられる。忘れてしまいたかった、なにもかも。

「エマって、あなた？」

ある日のこと。

病院に一人の小柄な女性がやってきた。

赤茶けた髪に、ソバカスの散った勝気そうな顔。まだ少女といってもいいようなその女性は、キョトンとするエマを一睨みすると、何故か不機嫌そうにフンッと鼻を鳴らして立ち去ってしまった。

一体なんだったのだろう。

不思議に思ったエマだったが、その答えはそう時を置かずにもたらされた。

「あの時はごめんなさい！」

そう謝罪するのは、あの日エマにガンを飛ばしてきた女性。勝気な顔が今は居た堪れないくらい萎れている。

女性は、レヴァンの恋人で名をイリサといった。

ずっと聖職者である父親に付き添い遠くの神殿に行っていたそうなのだが、昨日町に戻り、得体の知れない女がレヴァンの元に居着いたと聞き、いてもたってもいられなくなってしまったらしい。
しかも、病院を訪ねれみれば案の定見知らぬ女が我が物顔で仕事をしている。
気に入らなくて、ついあんな態度を……。
「本当にごめんなさい！」
謝ると言う事はすでに誤解は解けているのだろう。なんとなく、誤解の原因を作ってしまった自分にも非がある気がして、こちらこごめんなさい、と謝る。
その後は謝り合戦になってしまい、互いの謝罪が十を超えたところで見かねたレヴァンにとめられた。

レヴァンとイリサはいいコンビだ。
だらしないように見えてしっかりもののレヴァンと、勝気で勘違い屋だけど素直で可愛らしいイリサ。二人はエマの知っている恋人や夫婦のどれとも違って、とても幸せそうに見えた。近いうちに、二人は結婚するだろう。

エマはそれから新しい“居場所”を探して出かけるようになった。
レヴァンもイリサも今のまま病院にいればいいと言ってくれるが、いつまでも二人の世話になるわけにもいかないだろう。
幸い、エマは子ども達に読み書きを教えることが出来る。
どこか別の町に行っても、最初こそ苦労すれ、一人でも教師としてやっていけるだろう。

そうして、近くの町にも足を伸ばすようになった頃、エマは町で一人の男の子に声をかけられた。
その男の子は、以前病院で字の読み書きを教えたことがある子だ

った。
旅芸人の一座の子どもとかで、たまたまあの町に来ていたとき、他の子に連れられてエマの元に通ってきていたのだ。
先生。
そう呼びながら駆けてくる子の横にはもう一人似た年頃の男の子がいた。黒い髪に同じく黒い知的な瞳。滅多に見ないような美しい容貌のその少年は、この町に住む漁師の夫妻の子どもだという。
どことなく、見知った誰かに似ている。
けれどエマはそれが誰だったか、上手く思い出せなかった。

その後、子ども達とは二、三言会話を交わして別れた。

数週間後、エマは再び男の子達と会った町に足を伸ばした。今日は引越し先を探しに来たわけでなく、近隣の町の中では唯一この町にしかない図書館に寄るためだ。
新しい新居は別の町で見つかった。老夫婦が住んでいた家を間借りして小さな教室を開けることになったのだ。今日はその教室で子ども達に教える為の教材を探しに来た。もっとも、教材を買うお金などないので、図書館で見つけた本の内容をしっかりと頭に焼き付けるつもりだ。
と、数週間前に男の子達と会った所と同じ場所に通りかかったとき、先生、と耳慣れぬ声が聞こえてきた。
馴染みのない声に、エマを呼んだともわからないのに、つい癖で振り向く。すると、そこには先日出合った黒髪の男の子が立っていた。
どうしたの？
聞くと、エマを待っていたという。
驚くエマに少年は彼女の手を掴み騎士の話をして欲しい、とせがんできた。
どうもエマが以前もう一人の少年にした話を彼から聞いて、自分

も聞きたいと思いエマを待っていたのだという。先日会った時に言えばよかったのにというと、その時は忘れていたと答えた。
仕方なくエマは、今日は用事があるからまた明日同じ場所で待ち合わせをしようと約束をした。
少年は頷き、翌日二人はまた同じ場所で会うことになった。

騎士の話、というのは以前エマについてくれていた騎士から聞いた冒険の物語だ。
作り話の中に自分の経験も混ぜてあるのだろう、ところどころが妙にリアルで、それが一層子どもたちの興味を惹きつけた。
そういえば、あの二人はどうしているだろう。
ふと思い出すのは、以前自分に仕えてくれていた騎士と侍女の夫婦のこと。彼女たちの子どもも、順調に生まれ育っていればちょうどこの男の子くらいの年齢になっているだろう。

騎士の物語は長く、次の日も、その次の日も話は続いた。
その結果、エマたちは定期的町で約束をし、会うようになった。

そうして男の子との“お話し会”が続いたある日のこと。
既に病院から新居へと引っ越していたエマは、その日も新居から男の子のいる町へと出かけて行った。
ところが、待ち合わせの時刻になっても男の子はやってこない。
一体どうしたのか、なにかあったのだろうか。
ソワソワと待ち続けることしばし。
「エマというのは貴女ですか？」
一人の男がエマに声をかけてきた。
「そうですが」
振り向いてその人を見上げた時、男は驚いたように目を見開き、エマの顔を見た。
「どうかしました？」

けれど、エマには男の顔に見覚えはない。
首を傾げるエマに、男は「そんな」とか「まさか」とか呟いた後、もう一度「エマさんというのは貴女ですか」と聞いた。
「そうです」
エマはもう一度是と返す。
男はどうやらあの黒髪の男の子の保護者だったようで、彼は風邪を引き此処には来られなくなった旨を告げた。
そうか、風邪なら仕方ない。
少年のかわりに謝る男に首を振り、次はどの日に、どの時間にと伝言を頼みその日は帰宅することにした。

それから少年との“お話し会”には、何故かその男性もついてくるようになった。
最初は小さい子の一人歩きは危険だから、付き添っているのだろうかとも思ったが、けれど男性は少年についているというよりは、エマの方に興味があるようだった。

こういうことは、以前にも会った。
レヴァンの病院で働いていた時、一人の男性に付き纏われた。白い肌と、金にも見える蜂蜜色の髪。町の女性は殆どが家事や手伝いなどで外に出ており、肌は健康的に焼けているし、髪も比較的濃い色が多い。
自分の外見が否応なく周りの目を引くのだと知ったとき、エマはできるだけ肌の出ない服を着るよう心がけ、髪もきつく結ってその上から布を被るようにした。
昔から、ろくでもないことばかり呼び込む自分の容姿が好きじゃなかった。

だからエマは今回も、男に対しいい思いを抱いていなかった。

女というだけで力づくで乱暴される恐怖、屈辱。
封印しかけた嫌な思い出が蘇らないように、エマは自然、気を引き締めた。

そっけなく接するエマに、男はけれどいつもめげることなく声をかけてきた。
話の内容はどれも他愛ないもので、今日はいい天気だとか、体調はどうだとか、そんなことをいつも訊いてきた。
帰り際には必ず家まで送る、と一言が投げかけられるのだが、けれどエマは絶対にそれに頷かない。
優しげに見下ろされる感覚も、何故か恭しくかけられる言葉もどこかで経験したような気がするけれど、それを思い出そうとするたびにエマはひどい恐怖感に襲われた。
過去の記憶は彼女にとって忌々しいものでしかなく、彼女は無意識の内にそれにカギをかけ、忘れたものとして振舞っていたのである。

だから彼女は、男がかつて彼女に仕えてくれていた騎士その人であることに気づかない。
“そういう存在がいた”ことは覚えていても、もう彼の顔も声もなにもかも思い出せなかった。自分がどれほど彼を愛していたかも、覚えていない。

“彼”はずっと彼女のことを探していた。
王国の第一王女、エマリア姫。
両親に愛されず、妹姫からも疎まれる孤独な姫君は、けれど王宮の誰よりも気高くいつも凛と前だけを向いていた。
「命に代えてもお守りします」

宣誓の言葉は本心からのもの。自分がこの人を守りたい。彼女を傷つける何者からでも、一生側にいて守って差し上げたい。
けれど、彼は結局彼女を守ることもできずに王宮を去ることになった。

事の発端は姫の父王が姫付きの侍女に手を出したことだ。
王は、前王妃にそっくりな姫を激しく愛すと同時に激しく憎んでいた。
エマリア姫は国王陛下の本当の子どもではない。婿養子として国王がこの国にやってきたときには、もう既に王妃はエマリア姫を身ごもっていたのだ。
しかも、その相手は王妃の実の叔父であった前王弟殿下だという。
政略結婚ながら、王妃を深く愛していた国王はその事実を知って尚、王妃を愛そうとした。が、王妃が亡くなり不義の子である姫君だけが残されると、王の思いは段々と憎しみへと傾いていった。
王妃にそっくりな姫が愛おしい。けれど、自分の子でない彼女が憎い。二つの思いは王の精神を歪ませ、王はやがて姫を苦しめることに楽しみを見出すようになった。
後継者教育とは名ばかりの、虐待に始まり、精神的な苦痛。
王は姫の支えであった侍女と騎士に目をつけ、二人を苦しめることで間接的に姫を苦しめようとした。

――結局、侍女は身ごもるまで王の残酷な所業を姫に告げることはなく、騎士は侍女の腹の子の本当の父親を隠すために、彼女とともに王宮を辞すことに決めた。
だが、それが巡り巡ってあんなことになるとは、思ってもいなかった。

“彼”はずっと王宮を辞したことを後悔していた。
一生守ると誓ったのに、本当に助けが必要な時、彼は彼女を守る

ことが出来なかったのだ。

宰相の家が国王軍におとされた時、彼は真っ先にエマリア姫の安否を確かめに向かった。

焼け焦げた屋敷跡に、彼女と思しき亡骸は見当たらない。けれど、逃げた者たちの中に彼女がいるわけでもない。

――一体、どこへ？

騎士仲間だった男に尋ねると、屋敷の者たちの中には、火から逃れようと裏の川に身を投げたものもいたと告げた。

「だが、あの激流じゃ助からないだろうな」

そんな、馬鹿な。

昔の仲間たちが川に向かって手を合わせる傍ら、彼だけは頑なに姫の生存を信じていた。

どうしても彼女が死んだなんて考えられない。

ほとんど祈りに似た気持ちだった。

もう一度、彼女に会いたい。

王宮を辞してから後も、彼の心にはずっと彼女がいた。

一緒に王宮を辞めた侍女とは、しばらく同居はしたものの結婚はしなかった。彼女は幼馴染で大切な存在ではあったけれど、互いに愛はなかったのだ。

侍女の方はじきに移り住んだ町で愛しい人を見つけ、その町で漁師をしている男と結ばれた。騎士であった男は侍女夫婦の近くに住み、子どもの成長を見守っていたが、ある程度子どもが大きくなったら自分は旅に出ようと考えていた。

行方不明のエマリア姫を探す為に。

そうして、旅の費用を貯めながら着実に旅支度を整えていた、あ

る日。
彼はようやく彼女と再会する。
白かった肌は少し日焼けし、長く滑らかだった蜂蜜色の髪はきつく結われ隠されていたけれど、でも彼には彼女が分かった。
どんなに会いたかっただろう。
彼女は彼に気づいていない。もしかしたら、覚えてすらいないのかもしれない。
しかし、彼は自分に誓った。
今度こそ彼女を守ろう。彼女に害為す、この世界の全てのものから今度こそ守ってみせる。

「エマ」
「なにか？」
名前を呼ぶ度に頑なな返事が返される。
けれど彼はそんなことに構わず、ありったけの愛情を込めて彼女の名前を呼んだ。

その呼びかけに、やわらかな返事がされるまで、きっと長く時間はかからないだろう。
遠くない未来、大きくはない家の中、笑い合う二人の男女の姿がある。
男は蜂蜜色の妻の髪を撫で、妻である少女はうっとりと目を閉じ、その身をゆだねた。
彼女の表情にもう憂いはない。
これからは、ただただ幸福な日々が二人を包むことだろう。
「愛している、エマ」
「……私もよ、ディオン」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0884o/

水色pink（短編集）

2011年9月25日10時33分発行